

2004年度 I.共通教育科目：密教美術の世界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 雅秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23980">http://hdl.handle.net/2297/23980</a>

2004 年度



## I. 共通教育科目：密教美術の世界

### 1. インド密教美術への招待

映写された写真を見ているとき、インドの寺院跡が写されて、それは日本の寺院とは違いましたが、それは日本とインドの気候の違い、建築技術の違いとも関係しているかと思えます。仏の顔も仏教以外の要素を反映していると高校時代に世界史で習いました。仏教を学ぶためには仏教以外の知識もやはり必要なのでしょうか。あと、個人的に仏様の髪が実は長いということが衝撃的でした。

建築物についてはそのとおりです。気候や風土が重要な条件になりますし、インドにはインドの、日本には日本の建築学（建築術）の伝統があります。また、建築物、とくに寺院のような宗教的な建築物は、単にそこで何かの活動を行ったり、生活をするといった実用性だけではなく、神や仏をまつのにふさわしい特別な空間として作られます。このような、いわば「聖なる空間」は、しばしば実用性よりも象徴性が強調されることがあります。仏教の寺院だけではなく、キリスト教の教会、イスラム教のモスクなどからも、このことはわかると思います。仏像の顔については、これから授業でゆっくり見ていきます。同じ国でも時代や地域でさまざまな違いがあり、それが様式や作風と呼ばれます。その一方で、日本で作られた仏像にとってもよく似た姿の仏像がインドにもあります。また、われわれは仏像を見るとき、顔について注目しがちですが、それ以外の要素にも、さまざまな共通点や相違点があります。仏教を学ぶために必要な知識についてですが、一般化して言えば、当然さまざまな知識が必要です。しかし「仏教に関する知識」と「仏教以外の知識」との区別は、現実にはそれほど簡単ではありません。むしろ、仏教の何が知りたいのかという動機にしたがって、必要とされる知識は変わってくるでしょう。また、どの学問分野でも言えることですが、研究を進めるほど、さまざまな問題に遭遇し、それを解決す

るために、いろいろな知識が必要とされます。最後の髪の毛が長さですが、一般に菩薩は長い髪の毛をそなえています。大日如来が長髪なのは、この仏が特別に菩薩の姿をとるからです。髪の毛以外にも、仏にはさまざまな身体的な特徴があり、その中にはとても信じられないようなものもあります。これについては、授業で紹介します。

インドの人は大部分がヒンドゥー教を信仰しているというように中学で習ったのですが、仏教では「聖地」として、また発祥地として定められているので、インドでの仏教の布教度はどのくらいなのでしょう。こういう像が保管されているということは、かなり仏教徒は多いのでしょうか。日本の仏像はインドの仏像に比べ人間に近い顔をしているように思います。インドの仏像は顔が怖いというか、奇妙というか…。日本の仏像は顔が丸くて柔らかい感じで、インドの仏像は顔が細く、目つきも強い感じがします。

インドの人々が信仰しているおもな宗教には、ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教があります。このうち、ヒンドゥー教が人口の6割、イスラム教が3割、キリスト教が1割程度になります。ヒンドゥー教はインドの宗教と一般には考えられています。インドの人が「私はヒンドゥーである」といった場合、われわれが「私は日本人である」というのに、むしろ似ています。その中で、どの神をおもに信仰するかで、いろいろな派がさらに分かれます。仏教は現在ではほとんど信仰されていません。「新仏教」として、19世紀に再興された仏教がわずかにあることと、地域によって、スリランカや東南アジアと同じ上座部仏教や、チベット仏教の信者がいますが、インド全体から見れば、きわめてわずかです。授業で紹介する仏像は、実

際に寺院の中に祀られて、信奉されているものではなく、遺跡で発掘され、博物館などで保管・展示されているものです。質問の後半にあるように、仏像の顔の特徴をとらえて、表現するのはとてもいいことです。さらに、身体的な特徴や衣装、装身具、周囲の装飾などにも注目してみてください。

大日如来像の「如来」ってどういう意味ですか。私がいつも利用するバス停の名前も「如来寺前」というバス停です。少し疑問に思いました。あと、仏像をたくさん見るのもおもしろいと思いました。が、仏像が作られた背景や、どのような人が作ったのかということなども知れたら、より仏像に興味をもていました。

「如来」は仏を呼ぶときの名称の一つで、サンスクリットで「タターガタ tathāgata」と言います。「かくの如く来たもの」という意味ですが、いろいろな解釈があります。如来も菩薩も明王も、仏の位やグループを表す名前です。はじめに説明してもいいのですが、私の方針として、イメージからこの世界に入って行ってほしいので、説明はもう少し後に行います。また『インド密教の仏たち』を書いたときに意図したのですが、このような仏の位はけっして固定的ではなく、流動的であり、むしろそこに仏教美術や仏の世界のおもしろさがあると思います。仏像の制作背景などはこの授業のねらいでもあり、これからゆっくり説明していきます。

何気なく聞いていたら菩薩の頭は髪の毛を結ったものだといっていたので、「へー」と思った。仏像の頭の形を意識したのは、おそらく今日がはじめてである。さらに、観音の頭にさらに阿弥陀がのっているとは…。親に連れられていろいろな美術館につれていってもらいましたが、いったい何を見てきたんでしょう。親に申し訳ないです。不空縹索観音立像ってカッコいいですよ。手がいっぱいある仏像さんって好きなんです。あるのは何のためだったか忘れてしまいました。さまざまな災いから守るためでしたでしょうか…。ヴァジュラバイラヴァ像というのを見たとき、正直、

仏様だとは信じられなかった。大威徳明王とつながりがあるといわれても、大威徳明王の方が頼れるような気がしてしまう（強そうだし）。

観音の髪型は髪髻冠（はっけいかん）といって、長い髪の毛を冠のように結ったものです。日本の観音も同じような髪型をしています。これに対し、文殊は髪をいくつか束ね、髻（もとどり）を作ります。数は5つのことが多いのですが、7つや9つのものもあります。これはインドの童子の姿を受け継いでいると言われます。仏像を小さいときから見てきているのは、この分野ではとてもいいことです。授業ではいろいろ新しい発見や知識がえられると思います。腕の数の多い仏については、大勢の人が質問票にあげていました。日本では千手観音が有名ですが、それ以外にも不空縹索観音や如意輪観音のような観音に、また、授業で紹介した降三世明王や大威徳明王などの明王たちに、しばしば多臂像が見られます。衆生（しゅじょう、われわれ生類のこと）を救済する機能を、多くの腕で表すというのが一般的な説明ですが、むしろ、なぜそれを表現するために腕の数を増やしたのか。そもそも、腕の数が多という、非人間的な姿をとることを、なぜ、許容できたのかという問題の方が重要です。これらは簡単には説明できませんが、宗教的なイメージのあり方そのものに対する考察となります。ヴァジュラバイラヴァはインドでも信仰されていたようですが、作例はありません。また、日本にはほとんど伝わらなかったようです。これに対し、チベットでは人々の信仰を集め、とくに文殊の化身としても信奉されました。チベットの仏像は、このような特殊な仏ではなく釈迦や観音であっても、一般の日本人にはくせがありません。また、日本にはほとんど伝わらなかったようです。これに対し、チベットでは人々の信仰を集め、とくに文殊の化身としても信奉されました。チベットの仏像は、このような特殊な仏ではなく釈迦や観音であっても、一般の日本人にはくせがありません。また、日本にはほとんど伝わらなかったようです。

昔から密教とかに興味があったので、たくさんの仏を見られて楽しかった。今度はもっと印とか梵字とかについて、詳しく説明してほしい。あと、仏の地位なども知りたい。今日、紹介された仏像は、高野山とかだけだったけど、京都や奈良にある仏像は違うんですか。また、手の数や顔の数の

違いは地域や国ごとの風土によるんですか。

はじめから密教に興味を持っていてくれるのは、授業をするものにはうれしいです。他の方の質問で、「私は密教の意味が分かりません」というものがあつたので、簡単にここで説明しておきます。

密教とは 5、6 世紀以降のインドで現れた仏教の一形態です。中国、東南アジア、ネパール、チベットなどに伝播しました。日本には平安時代の初期に空海や最澄に代表される「入唐僧」（にっとうそう）たちによって、本格的にもたらされました。現在でもその伝統は生きていますし、チベットやネパールの仏教は密教の要素がかなり濃厚です。「密教」という言葉に相当するインドの原語は実はありません。日本の真言宗や天台宗の中で用いられ始めた言葉で、大乘仏教までの仏教を「顕教」と呼び、これよりも優れた教えで、しかも選ばれた者以外には秘密にされているという意図で付けられたものです。インド仏教の歴史を簡単にまとめれば、釈迦の時代を含む初期仏教（あるいは原始仏教）、部派仏教、大乘仏教、密教ということになります。インド仏教の最終的な形態が密教です。ただし、その時代も大乘仏教やいわゆる小乗仏教もありますので、段階的に変化したというわけではありません。また、密教の修行をすることが許されたのは、大乘仏教の修行階梯を終え、特別な能力（とくに実践における霊的な能力）をそなえたものだけといわれています。その特徴として、次のようなものをあげることができます。

- ・瞑想やヨーガによる神秘体験を悟りととらえる
- ・教理的には大乘仏教を継承、とくに空思想と如来蔵思想に基礎を置く
- ・複雑な儀礼体系をヒンドゥー教と共有
- ・壮大な神々の世界と精緻な図像学を保持

密教はインドの宗教全体から見ると、中世以降、流行したタントリズムと呼ばれる宗教形態と、さまざまな点で共通しています。以上の説明だけではよくわからないと思いますので、授業でも機会を見つけてお話しします。また、仏の地位はこの先の授業でくわしく紹介するつもりですし、印にもときどきふれますが、梵字はちょっと無理です。

関心があれば、参考文献を紹介します。また、梵字で表記されるサンスクリットは、文学部の授業として開講されていますので、こちらに関心があればどうぞ。

授業で紹介した仏像に高野山のものが多かったのは、日本の密教図像のすぐれた作品がここに多く残されているからです。京都や奈良にももちろん密教のお寺はたくさんあります。前回お見せした明王などは、いずれも京都の東寺のもです。高野山の仏像は、私自身が高野山に住んでいたこともあり、なじみが深いことと、去年から今年にかけて各地で大規模な展覧会が開催されていることから、比較的多く紹介すると思います。

**アジャンター石窟寺院の守門神と、法隆寺の観音菩薩立像が似ているとのことでしたが、やはりどちらかを参考にして、あるいはどちらもあるものを参考にして描いたかしたから似ているのかなあと思いました。場所が違っても伝わってきたものがあるのでしょうか。**

両者の間の距離や、制作年代から考えて、直接の影響関係や、共通する図像モデルがあつたとは考えられないようです。むしろ、日本の仏像に、インド的な様式がよく残っているということで、注目されています。なお、アジャンターの守門神は観音と紹介するものもありますし、授業でもそのあたりははっきり言わなかったのですが、最近の研究では観音や蓮華手とする解釈は否定されつつあります。守門神という聞き慣れない名称を用いたのはそのためです。守門神とは文字通り、門を守る神で、寺院の門の左右に置かれたり、描かれたりします。このアジャンターの守門神も、門の反対側にもう一体の守門神がいて、観音（蓮華手）と対をなすことから、そちらは金剛手という名の菩薩とする人もいますが、これも誤りです。ただし、守門神はヤクシャ（夜叉）と呼ばれる下級神と関係があると考えられていますが、のちの菩薩像とも図像的なつながりがあり、全く菩薩と関係がないわけではありません。

**私の出身高校にはお坊さんの先生が 3 人いました。**

その先生たちは家がお寺で、奥さんがいて、子どもがいる在家のお坊さんだったんだなぁと出家していないんだと初めて気づき、不思議な感じがしました。仏像とかは同じに見えるけど、実はけっこう違うとわかっているけれど、どこがどう違うのかはよくわからなかったので、頭が違うとか、結んでいる印が違うとかあるというのがわかってすっきりしました。

「日本仏教は仏教ではない」と言って驚かせましたが、もちろん、これは言い過ぎです。インドの仏教と日本の仏教は、同じ仏教といってもずいぶん違い、日本仏教のイメージでとらえると危険であることを自覚してもらうためです。日本仏教はこの国の独自の展開や変容として、とらえるべきでしょう。宗教は信者が増えて、拡大すればするほど、つねに「正統と異端」のせめぎ合いが見られます。ある人々にとっては「改革」や「発展」であっても、他の人（特に保守的な人）にとっては「改悪」であり「逸脱」にしかすぎないこともよくあります。私の授業では「仏教の本当の教

え」とか「正しい仏教」とかを強調することはありません。どのような形態をとっても、それが仏教であると主張されたものは、たいてい仏教としてあつかえます。ただし、その対象は歴史的なものに限られます。

マンダラといえば昔、富山の立山かどこかで見た気もするのだけど、気のせいでしょうか…。

マンダラは本来、密教の中で作られた仏たちの集合図でしたが、日本では独自の展開をして、さまざまなマンダラを生み出します。立山曼荼羅ものそのうちのひとつで、修験道や浄土や地獄への信仰など、多くの要素を含んでいます。マンダラは授業の中の重要なテーマの一つですが、残念ながら日本でのこのようなマンダラの展開までお話しする余裕はありません（ときどき文学部の授業であつかえます）。関心があれば、直接聞きに来てください。また、富山には「立山博物館」という、立山曼荼羅とその信仰を中心にしたすぐれた博物館があります。機会があれば行ってみたいですね。

## 2. インドの仏教美術の流れ

拓胎霊夢の象は、花祭りの時にお釈迦様が乗っている白い象なのかもしれないと思った。聖なるものを表現するのに、写実を避けて象徴的なものにするのは、わからない人から見たらむずかしいが、本当にその教えを受けたい人たちにとっては、非常に大切なんだと思った。浮彫には仏像だけでなく、仏教の説話も多くあって、わかりやすいなぁと思った。

白い象はそのとおりで、釈迦の誕生を祝う花祭りの時に山車のように使われることもあります。この風習は日本の各地に残っていますが、古くは中央アジアでも行われていたことが、玄奘の『大唐西域記』にも記されています。経典では釈迦は兜卒天（とそつてん）から白い象の姿をとって降りてきて、母親である摩耶夫人（まやぶにん）の胎内に入ったと記されています。先週お見せしたパ

ールフットの浮彫はそのまま、象が摩耶夫人の上に浮かんでいます（このまま落ちてきたら、摩耶夫人はつぶれてしまいそうですが）。これに対し、中国では釈迦が象の姿をとるということに抵抗があったようで、象が乗り物のようになって、その上にお稚児さんのような釈迦がまたがった姿で描かれます。日本でもその伝統が受け継がれ、拓胎霊夢の作例では、たいてい象に乗った釈迦となっています。花祭りの白い象は、これを受け継ぐものでしょう。なお、普賢菩薩（ふげんぼさつ）という菩薩は象に乗ることがありますが、これも関係するかもしれません。象徴的な表現は、写実的な表現に比べると、たしかに作品の解釈や理解という点では劣るように見えるかもしれませんが、当時のインドの人々にとっては、必ずしもそうではないかもしれません。われわれは写真やテレビ

などの映像に慣れているので、一見、本物のように見えることが、ありのままの姿のように思いますが、それ以前の人々にとって、絵とは必ずしもそのようなものに限りません。それは文化や嗜好によって大きく異なるでしょう。日本の江戸時代の浮世絵などもその一例です。あるいは、新聞で政治家などの有名人を写真ではなく、誇張気味の似顔絵で表現するのも、一種の象徴的な表現と見ることが可能です。絵画と「ありのままの姿」の関係は、これからも授業の中で取り上げて行くつもりです。

**神のような崇高な存在を、自分たちと同じ人間の姿で表せないという考えは納得できたんですけど、だからって、なぜ木や法輪に象徴するか疑問です。万物に神が宿るという日本古来の考え（アニミズムでしたっけ？）に少し似ているのかなぁと思いました。**

象徴的な表現として選ばれるものは、いずれも何らかの意味を持っています。たとえば、法輪は釈迦が説いた教えの象徴ですが、その背景には輪の持つ意味と、さらにそれを一種のエンブレムとする帝王観があります（これについては今回取り上げます）。樹木はインドでは古くから民間信仰の対象として、きわめて重要な意味があります。これは現在でもインドで広く見られ、樹木そのものが神と見なされ、礼拝されています。釈迦が生まれるときに、摩耶夫人が無憂樹という樹木につかまったり、釈迦が悟りを開くときに菩提樹の根本に坐ったり、涅槃にはいるとき、沙羅という2本の木の間で横たわったりしたのも、このような樹木崇拝と関係があるといわれています。とくに菩提樹は、悟りを開くために一種のエネルギー源のような役割を果たしたようで、釈迦の悟りと密接に結びついています。このほか、足跡や仏塔なども釈迦のかわりにシンボルとして用いられます。「万物に神が宿る」というアニミズム的な考え方は、たしかに日本で広く見られますが、けっして日本独自のものではありません。語源であるアニマもラテン語から来ています。インドでも神は無数にいますし、自然物や、あるいは人工的なもの

であっても、礼拝の対象になります。このような考え方と仏教美術における象徴的な表現とは発想が違うのではないかと思います。

**日本の夜叉は怖いイメージがあるけど、インドのヤクシャはそれほど恐ろしい感じがしないなぁと思いました。あと、28番目の写真では、ヤクシーを支えている人物がヤクシーより小さかったりして、人物の縮尺が一定していないのが不思議な感じでした。**

日本の夜叉は般若のお面のようなイメージがありますが、これは日本独自の表現で、インドでは全く見られません。前回のスライドでは、ヤクシャをかなり紹介しましたが、これも仏教美術の重要な題材です。仏教美術を彩る多彩な登場人物とも呼ぶことができます。初期の仏教美術をはじめ、今回紹介する南アジアのアマラヴァティーやナーガールジュナコンダ、あるいはアジャンタやエローラなどの石窟寺院でも好まれて描かれました。密教の仏にも、その特徴が受け継がれていきます。このような存在として、ヤクシャの他にもナーガ（龍王）やマカラ（想像上の生き物で、海に棲む）などがいて、インドの仏教美術の魅力のひとつとなっています。作品の中の人物の縮尺や大きさが一定ではないことは、たしかにインドではよく見られます。その理由にはいろいろありますが、いずれにしても、写実性が重視されなかったことや、独自の表現方法があったことが考えられます。

**ストゥーパ。広辞苑で「そとば」（卒塔婆）を調べると①塔、②供養追善のために墓に立てる上部を塔形にした細長い板と。「ストゥーパ」って聞いたときに「卒塔婆？」と変換されたのですが、いや形が違うだろうと思い返して、調べてみたら先端が塔の形だったのですね…。**

**驚きだったこと。釈迦が象や菩提樹や車輪（法輪か）など象徴で表されていること。理由を聞いたら納得ですが。たとえばわかりやすかったです。もっと驚きだったのは、右脇から生まれてきたことです。どうやって！？痛そう！**

ストゥーパが卒塔婆の語源であることはそのと

おりです。本来、ストゥーパはインドで作られた巨大な建造物で、仏教ではおもに仏の骨（「舍利」と呼ばれます）を取めるために作られました。写真でお見せしたように、半球形をしているのですが、中国や東南アジアなどではそれぞれ異なる形態の塔になりました。インドに比較的近いのは、ネパールやチベットの塔です。日本の五重塔や七重塔は、ストゥーパとはずいぶん形態が異なりますが、多宝塔と呼ばれる形態の塔は、ストゥーパに少し似ています。これらの仏塔については、もう少し先の授業で取り上げます。日本の墓地で用いられる板状の卒塔婆は、五輪塔と関係があります。五輪塔はその名の通り、五つの部分でできており、一番上に宝珠型（タマネギのような形）、その下に球や立方体などの石が積み重ねられています。これらは下から順に、地、水、火、風、空の五元素を表しています。人体を含め、すべての存在物はこれらの五つで構成されていると考えられ、人も死ぬと五元素に戻るため、墓として五輪塔が建てられます。卒塔婆の上の部分のでこぼしたところは、五輪塔の形を簡略化して示したものです。

釈迦の象徴的な表現は、古代の仏教美術のもつ最も重要な特徴であるとともに、宗教美術を考える上でもいろいろ示唆に富むため、強調しました。このような表現方法は、授業の本題である密教美術でも、実は重要な役割を果たします。最後の質問の「右脇から生まれる」ことの原因ははっきりわかりません。釈迦の超人的な特徴のひとつとして、古くから伝えられています。記憶が定かではありませんが、キリスト教やギリシャかローマの英雄などにも、右脇から生まれる伝説があるそうです。

初転法輪に向かう仏陀の像に、天使のような羽の生えた人が彫られていてびっくりしました。キリスト教やイスラム教のように「天使」って仏教にもあるんでしょうか。「イーをするヤクシャ」がとてかわいくておもしろかったです。日本にもこういう面白味のある仏像ってあるんでしょうか。このほかにも何人かの人から、天使についての指

摘がありました。ガンダーラ美術はヘレニズム文化の影響を受けているので、西方世界のいろいろな要素が現れます。スライドではアポロンとダフネや、ハルボクラテースを紹介しました。羽の生えた童子は天使の姿に見えますが（森永のマークでもおなじみ）、それよりも古い起源を持ち、プットーと呼ばれます。弓矢を持つこともあり、この場合は愛の神となります。ガンダーラ彫刻ではプットーが好んで描かれ、装飾文様の中などにもしばしば現れます。この作品の場合は、法輪の左右から礼拝をしている姿をとっていますが、インドでは、同じような役割を神が行っています。このイメージは中央アジアから日本へも伝わり、飛天や天女の原型となります。

中学生の時、中国美術かインド美術家の像の浮彫を見たことがあるのですが、あれは酔象調伏の図だったのかと今発見しました。浮彫には丸い円の内にシーンを彫ってあるものがありますが、これは「法輪」をイメージしているのでしょうか。

授業ではまだ「酔象調伏」のスライドを紹介していませんが、配付資料でわかったんですね。名前も意味もわからないまま、イメージだけ記憶に残っているという作品が誰にでもあると思いますが、そういうものの再発見があるのはいいことですね。円形の区画はストゥーパの欄楯装飾で好まれた形式で、パールフットやサーンチーをはじめ、インド各地で見られます。法輪も円ですが、実際は関係はないようです。円形区画をそのまま法輪として表現することがないからです。円という形そのものが好まれたようで、この中に釈迦の生涯の出来事などを巧みに表現しているところがひとつの見所です。物語を表す場合にしばしば見られる異時同景図、つまり複数のシーンをひとつの画面に収める手法も、そのひとつです。

教科書にあった事柄が出てきたので、ゴールデンウィーク中に読んでおいてよかったと思った。

授業は一応、予備知識なしでも理解できるように準備していますが、教科書であつかったことが随所に出てきますので、読んでから講義を聴く方が

確実にによりよく理解できます。大学の授業は出席する皆さんのそれぞれの自覚に任せられています。が、「～することが望ましい」とか「～しなければならない」と指示されたことは、もちろんやった方がやらないよりずっといいです。

インドは中国と違い、文献として記録することが少ないと聞きました。歴史と伝説とが混在してしまっているようなインドにおいて、今日スライドで映写された仏教美術作品は考古学的にいろいろなことを語ってくれる、とても貴重なものであると感心しました。美術と歴史はそれぞれ独立して関連性を持たないものだと思っていましたが、関連性のあるものだとわかりました。

たしかにインドは「史料なき国」とも呼ばれ、徹底した記録主義の中国とは対照的です。しかし、仏教をはじめとする宗教関係の文献は、非常に古い時代から残っているので、これらも一種の歴史的史料として扱えます。仏教の経典の記述から、当時の人々の暮らしをうかがうこともできます。このほか、石に刻まれた銘文などもかなり残されています。考古学と美術とに密接な関係があるのはご指摘のとおりです。美術というと実際に絵を描いたり彫刻を作ったりする実技が連想されますが、授業で扱っているのは美術史という学問分野に関わります。美術史は高校までは歴史の中の文化のひとつとして学んだと思いますが、ひと

つの学問として成り立っています。その対象は博物館や美術館に展示されているものだけではなく、仏像のように現地の遺跡に残されたものも含まれ、現地調査が必要になります。その場合、考古学者との共同作業もしばしば行われます。

「初期の」仏教美術という言葉を用いておられましたが、仏教美術の時期区分の詳細はどのようになっているのでしょうか。

あまり意識せずに「初期」という言葉を使っていました。初期があれば中期や後期もありそうですが、実際は用いません。とくに釈迦をわれわれと同じような人間ではなく、象徴的な表現を取る時代を授業では「初期」と呼んでいます。具体的にはパールフットやサーンチーに代表されます。仏像が誕生したガンダーラやマトゥラーはその後の時代になります。南インドのアマラヴァティーなどは仏像と象徴的な表現が混在するので、少し状況は異なりますが、初期ではありません。その後は、インドの仏教美術の完成期とも言えるグプタ時代があります。具体的にはアジャンタ、エローラなどの西インドの石窟寺院や、サールナートを中心としたガンジス流域などが中心になります。授業のテーマである密教美術は、それに続くパーラ朝の時代に流行し、おもに東北インドがその舞台となります。

### 3. パーラ朝期の密教美術

仏の三十二相を読んで、よくここまで細かく考えたなあ…とただただ驚くばかりでした。高校の時に、仏像好きの先生が「装飾品がなくなればなくなるほど、仏様は偉いんだ!!」と言っていたのですが、どういうことなのでしょう。

三十二相は仏のイメージの基本となるので、知っておくと便利です。ただし、そのすべてが仏の姿として表せるわけではありません。たとえば長舌相のように、口を開いて舌を出した仏像でも作ら

ない限り、表現できないものもあります。また、白毫相をほんとうに毛髪のように表現したものもほとんどありません。日本ではガラス玉のようなものを入れることが多いでしょう。インドの仏像の場合、たいていはくぼみを作るだけです。金色相は仏が金色で表されたり、光背や頭光をとまなうことの根拠となりますが、実際にピカピカ光る仏像を作ることはなかったでしょう。三十二相は仏像の誕生に大きな役割を果たしたと考えられま

すが、その本来の目的は、仏像の姿をありありと想像すること、つまり瞑想することだったとも言われています。すでに釈迦が涅槃に入って仏に会うことのできない人々にとって、想像の世界であっても、仏と出会うことはとても重要だったので。日本では「念仏」というと、特定の名号を唱えることと理解されますが、本来は「仏を念ずる」ことなので、名前を唱えることではありません。「装飾品がなくなればなくなるほど、仏様は偉いんだ」というのは、ある意味ではその通りです。仏は世俗の世界を超越しているので、僧衣のみをまとい、質素な姿をしています。われわれのよく知っている仏像の姿です。それに対し、まだ仏になっていない菩薩は、出家前の釈迦がモデルになっているので、豪華な装身具でのごとごと身を飾ります。しかし、このルールが常に正しいわけではありません。授業で紹介している密教の時代には、仏の中にも宝冠や璽珞などの豪華な装身具を身に付けたものが現れます。このような仏は教科書の第1章でくわしく取り上げています。その一方で、菩薩でも地蔵は僧形なので質素です。また、密教の時代に現れた明王たちは、装飾品といってもかなり特殊なものを付けていますし、その位が高いか低いかは時代や立場によって違います。この分野のおもしろいところは、同じ仏でもイメージや地位が一定ではなく、ダイナミックに変化していることです。

**バングラデシュの遺跡がすごくきれいだった。遺跡って聞くと岩で作られたごつごつしたものを今まではイメージしていたけど、パハルプールは緑が生い茂っていて、本当にきれいだった。パハルプールも最初作られたときは岩が出ていたのかもしれないけど、今のパハルプールの方が絶対いいと思う。ラピュタみたいだった。**

インドやバングラデシュの遺跡と聞いたとき、一般の日本人はやはり荒涼としたところをイメージすると思いますが、実際はさまざまです。授業で紹介するベンガルやビハールなどの北東インドは、インドの中でも緑が豊かなところで、遺跡のまわりも田園地帯が多いようです。西インドのアジャ

ンタやエローラなどの石窟寺院も、木々の生い茂る山岳地帯で、雨期には遺跡のまわりにたくさんの川ができます。パハルプールのまわりが、湿地のようになっているので水が豊富であったことにも気がついた方がいたかもしれません。僧院自体はレンガや石を積んで作られていたので、ご指摘のとおり、おそらく当時は現在のような姿はしていなかったでしょう。バングラデシュというと、貧困の国、援助を待つ国、洪水に襲われる国というのが、日本での一般的なイメージですが、実際に訪れると、ダッカなどの町は活気にあふれていますし、農村は自然に恵まれ、ある意味でとても豊かな国です。

**今まで仏像をじっくり見たりすることはなかったけど、この授業を通して少しずつ興味が出てきた。今日学んだ〈三十二相〉を読んで、とくに驚いたのが白毫相で、仏像は普通単色でできているので、眉間の白毛には気づかなかった。しかも右旋と決まっているけど、なぜ右なんですか？右の方が縁起がいいとかあるんですか。**

授業の出席者が仏像に興味のある人ばかりではないと思いますが、これまでは全く知らなかった世界を知ることができるのも、いいのではないのでしょうか。教養の授業はそのためのものでもあります。ちゃんと出席すれば、半年後にはインドの密教美術の最先端の知識が身に付いているはずで、三十二相の中でも白毫相は、まさかあれが「毛」だとは思わないので、普通の人は「ヘー」と驚きます。白毫の毫の字には「毛」という文字を含んでいるのですが、なかなか気がつかないようです。右と左については、基本的にインドは右を左よりも優位におきます。これはインドに限らず、世界中ではほぼ普遍的に見られることです。この問題を扱った人類学の古典的な著作に、エルツの『右手の優越』という本もあります。釈迦の時代のインドでは、高貴な人に対する右遷（うによう）という挨拶の方法があります。対象が自分の右にくるように、右回りに回ります。このような対象には釈迦のようなものばかりでなく、仏塔などの建造物もあてはまります。仏塔の周囲には右

遶道と呼ばれる道があり、信者はその周りを右回りに回って礼拝したようです。

孔雀明王像は高野山展で実物を見ましたが、たいへん変わった仏像だったので、印象に残っています。孔雀のような不思議な鳥（姿は美しいが、蛇やトカゲなどを食べる悪食）が、信仰の対象となってしまうところに、密教らしさを感じました。後、先週のプリントで暁鳥敏という人を全然知らなかったのですが、少し説明があるとよかったです。（真宗大谷派の僧ということで、密教とは関係なさそうですが）

高野山展に実際に行って本物を見た経験があるのはいいことです。授業ではスライドで紹介するだけなので、なかなか本物の迫力などが伝わりません。インド美術関係の展覧会はこの時期にはあまりないようですが、高野山展をはじめ、日本の仏教美術の展覧会は、たいていどこかの博物館や美術館で行われていますので、機会を見つけて、是非いろいろ見て下さい。孔雀はインドの鳥の中でも、とくに宗教や神話と関係の深い鳥のひとつです。ご指摘のように蛇を食べると信じられているので、毒蛇除けの力を持つと考えられています。教科書の中でもふれています。孔雀明王は毒蛇除けの神様で、本来は女尊、つまり女性の仏です。日本には明王の一人として伝えられましたが、不動明王などと異なり、恐ろしい姿をしていないのは、このような起源があるからです。毒蛇除けよけに孔雀の女神が信仰されていたのは仏教だけではなく、ヒンドゥー教でも見られ、もともとは民間信仰のようなものだったと考えられています。暁鳥敏は明治から大正、昭和にかけて、仏教界のオピニオンリーダーとして活躍した人物です。当時の仏教界の持っていた力は、現在とは比較にならないほど強く、暁鳥敏もおおくの知識人階級の人々をひきつけました。一種の売れっ子評論家のような存在だったのでしょうか。それはともかく、資料を配付した意図は、本学の図書館の地下にはこの暁鳥敏の蔵書 5 万冊あまりが所蔵されていることを知ってもらいたかったからです。金沢大学のように戦後に本格的に成立した大学では、古い

時代の文献はあまり充実していないのですが、暁鳥敏の蔵書のおかげで、旧帝大などにもないような、仏教関係の貴重な文献が数多く所蔵されているのです。暁鳥敏文庫は誰でも閲覧することができますので、一度見て下さい。

サールナートの仏坐像など、数枚の写真の仏像の手の合わせ方が変わっている（手のひらと手の甲を合わせたような感じ）と思ったのですが、私は合掌というと、両手の平を合わせているイメージがあります。何か手の合わせ方の違いに意味はあるんですか。

サールナートの仏坐像は、合掌しているのではなく、転法輪印という手の形を示しています。手で作る独特の形を印（いん）と言いますが、仏像はそれぞれ独自の印を示します。転法輪印は説法印とも言って、釈迦が法を説くときの象徴的なポーズです。法を説くことを「法輪を転ずる」と言うことは、授業でも紹介しました。合掌はわれわれにとって仏教に結びついた手の形ですが、仏像そのものはあまり合掌をすることはありません。合掌というのは礼拝する側のポーズなので、礼拝の対象である仏像にはふさわしくないからです。菩薩や明王には合掌するものもあります。印にはいくつかの種類があります。地面に右手をふれる触地印（そくちいん）、座禅のポーズのような定印（じょういん）、右手の手のひらを前に示す施無畏印（せむいん）などがその代表的なものです。もう少し先の授業で、仏像のイメージの説明をする予定なので、そのときにくわしく紹介します。

仏教の中でよく「宇宙」という言葉を耳にして、何百年も前からすでに宇宙の概念があったのだなぁと驚いた。具体的に、仏教の中での宇宙とはどんな意味が込められていたのでしょうか。また、菩薩や釈迦など、仏像に種類が多すぎて混乱してきたので、整理しなければと思った。

「宇宙」というと現代的な感じですが、要するにわれわれのまわりにあるものです。「世界」と言ってもいいかもしれません。思想史的に見て、世界や宇宙をわれわれ日本人はあまり正面から取り

上げることはありませんでした。しかし、インドでは古代のヴェーダの宗教やウパニシャッド哲学において、最大の関心はこの世界とわれわれとの関係でした。そして、それはその後のインドの思想や宗教を貫くテーマでもあります。インドの仏教徒がいただいていた具体的な宇宙の姿については、マンダラの時にお話しする予定ですが、その背景となるインドの考え方については、以前に私が話したものを、ホームページの中にあげてあります。関心がある人は読んでみて下さい。仏の種類については、多くの方が「種類が多すぎる」「全体像がわからない」と思っているでしょう。次回に取り上げるつもりなので、もう少し我慢して下さい。はじめにそれを説明しないのは、仏の世界が固定的であるという印象を与えないためと、固有名詞の羅列になることをさけるためです。

・スツーパー図のスライドがプリントと違っていたのです。スライドの頁番号がプリントずれていたことに関係しているのでしょうか。

・プロジェクターの映像が鮮明になってうれしいです。

・仏の三十二相…そんなものが存在していたのですね。そりゃ多少の基本形態くらいは決めてないとみんな勝手に想像してしまうって話ですね。気になったのは 10 (陰蔵相) → 仏サマは男性なのですか。

スツーパー図の違いはよく気がつきましたね。配付資料を印刷した段階では別の写真だったのですが、画像が荒く不鮮明だったので、別のスツーパー図に差し替えたのです。番号がずれたのはこれとは関係なく、インド仏教遺跡地図を 2 回にわたって出したからです。プロジェクターの映像がよくなったという感想は、多くの方が書いていました。据え付けの機材を使った方が当然、楽なのですが、授業でも言っていたように、せっかく画像を鮮明に読み込む努力をしているのに、映像の質があまりに悪く、使用に耐えないので、文学部のプロジェクターをわざわざ運んできています。総合教育棟の備品の選定には、われわれ文学部の教員は関与していないのですが、こんなに劣悪な機

種を選んだ人の感覚を疑います。陰蔵相については「よくわからない」という人もいましたが、普段は性器が体の中に隠れているということです。ご指摘のとおり、基本的に仏はすべて男性ですが、密教の時代になると女性の仏も登場します。

仏教美術の作品には、さまざまな様子があり、それぞれにしっかりした「お話」があるのですが、それはどこから分かるのですか。経典か何かに書いてあるのでしょうか。

経典に書いてあるのです。仏教の経典というと、訳の分からない漢字の羅列というイメージがありますが、さまざまな物語に満ちています。とくに初期の仏教文献は、釈迦にまつわるエピソードが多く、読み物としてもとてもおもしろいです。日本では一般に経典というと、阿弥陀経や法華経のような大乘仏教の経典を連想しますが、これは仏教の経典史の中では、比較的、後世のもんです。授業で扱う密教美術の場合、仏像のイメージそのものを定めた文献が登場します。このような文献は、仏像の制作や仏の瞑想を前提としているので、釈迦の物語を説くような文献とはいささか性格が異なります。この問題は教科書の中でも扱っていますが、やや専門的です。

スライドで石窟寺院を見たときに、キリスト教のカタコンベを思い出しました。仏教だけでなく、宗教の多くには地中につながるイメージでもあるのでしょうか。火葬、土葬、鳥葬、林葬、水葬等、死者の葬り方はいろいろありますが、空や天のイメージを持つのは鳥葬ぐらいで、水葬をのぞく残りの葬り方は、どこか地のイメージが強いような気がします。

宗教と地のイメージのつながりは、私自身はあまり考えたことがなかったのですが、たしかに死を介して結びつくかもしれませんね。日本語でも「土にかえる」というと死ぬことを意味します。葬送儀礼が地と結びつくことも、それに関係するのではないのでしょうか。一方、石窟寺院が洞窟のように造られていることは、あまり地や死のイメージとは関係ないと思います。カタコンベも含め、

寺院や教会などの宗教的建造物は、むしろ「神の家」としてイメージされます。天上世界を地上に再現したと見る方が一般的です。このような建造物は本来、葬送儀礼とは関係なかったと思います

し、インドでは仏教の僧侶が葬送儀礼を行っていたわけではありません。実際にアジャンタやエローラの石窟寺院に行くといわれるのですが、内部は涼しくて快適な空間です。

#### 4. 日本の密教美術の源流？

日本では大日如来はポピュラーで数も多いのに、なんでインドの数が少ないんですか。しかも、今まで高校などで勉強してきた中で、インドの仏像を目にすることが少ないのはなぜなのでしょう。

大日如来は阿弥陀や薬師などに比べると、日本でもそれほどポピュラーではありませんが、たしかにインドよりは作例数は多いでしょう。日本の密教では大日如来が最高存在であるため、真言宗や天台宗の寺院ではしばしば大日如来がまつられます。東大寺や唐招提寺などの南都の寺院でも、大日如来の前身である毘盧遮那如来があります。インドの場合、密教の時代でも釈迦への信仰が根強く残っていて、如来像の作例数のおそらく9割以上が釈迦像です。現在のところ、確実に大日如来と確認されているのは20例程度にすぎません。密教の時代でも、人々の信仰の中心は、釈迦をはじめ、観音や文殊などの伝統的な仏たちだったことがわかっています。経典などの文献では無数の仏たちが登場しますが、実際に作例として残されているのはそのごく一部で、しかも作例数が豊富であるのは、さらにわずかです。このことは教科書でもしばしば強調しています。これまでに見てきたインドの仏像が少ないというのは、おそらくほとんどの人に当てはまるでしょう。よく紹介されるのはガンダーラ、サールナート、アジャンターの、しかも有名なものに限られます。しかし、インドに旅行すればわかるのですが、膨大な数の仏像が現地の遺跡や各地の博物館にあります。でも、これはインドに限らず、ヨーロッパの絵画のようによく知られたものでも同様です。ダ・ヴィンチやモネやピカソやの作品なら、有名なものはみんな知っていますが、実際にヨーロッパの美術館に

展示されている作品のほとんどは、見たこともないものですし、その作者も知られていません。美術に関する一般の知識は、じつはきわめて限られているのが普通です。

さまざまな仏像や仏伝図がこれまででてきたが、今まではどれも同じようなものだと思っていたが、最近、レポートをまとめたり、また、スライドをたくさん見るたびに、その仏像たちの微妙な違いや、その違いに秘められた意図などがちよつとずつわかってきたような気がする。また、マンダラの図などが日本などの遠い地に正確に伝わっているというのは、とてもすごいと思った。

先週のコメントには、レポートを書いたことで授業の内容がよく理解できたという感想が多く見られました。期待していた効果があったことがわかり、うれしく思いました。レポートは負担に思うかもしれませんが、授業で話すことができる内容はごくわずかです。それに対し、数時間で読める本から得られる情報量は膨大で、効率的です。しかし、内容が理解できないこともあると思いますから、実際にスライドを見ながらの授業の話も、必要です。両者が相補って、より深く理解できると思います。授業で紹介するスライドの仏たちは、初めて見るものがほとんどで、はじめは区別がつかないはずですが、ご指摘のように、回を重ねるにしたがって、次第にそれぞれの特徴がわかるようになり、見分けがつくようになります（これはちょっとした快感です）。ちょうど、初対面の人たちと親しくなるにつれて、はじめは違いがわからなかったのが、次第にそれぞれの個性がわかるのに似ています。講義の中では同じスラ

イドを何度も見る機会がありますが、その都度、違って見えるはずで。

釈迦仏伝図や四相図では、どうして初転法輪や涅槃図が上で、誕生が下なのだろうと思った。酔象調伏や舎衛城神変の話で、お釈迦様に親しみを感じられた。悪役の話に乗るなんて、お釈迦様も人間的な一面を持っているんだなあと思った。

四相図などの仏伝図の配置についてはよく気がつきました。これにはいろいろな説が考えられています。たとえば、時間の流れからは、誕生がはじめて、涅槃が最後なので、時間に沿って画面を下から上へと構成したと解釈されます。実際に、サールナートの仏伝図なども、このような配置を取るものがあります。また、その場合、涅槃は単なる釈迦の最期ではなく、完全な悟りを表し、すべての出来事の最上位に位置づけるという解釈もあります。パーラの八相図は形式の点からも説明することができます。初転法輪と舎衛城神変は、どちらも法輪印を示す釈迦を描くので対になります。酔象調伏と三道宝階降下の釈迦は立像で、やはりセットになります。一方、降魔成道は中心に大きく表され、また、伝統的に涅槃は最上位に置かれます。涅槃のような寝姿が八相図の他の場面にはないことも関係あるでしょう。誕生と猿の奉蜜が残るので、これを一組にし、対になっているものをそれぞれを左右対称に置くことができあがります。このように、仏像の解釈をする場合、意味と形式の両面からのアプローチが可能です。

図書館の世界美術全集のインドのところに授業で見たような写真をたくさん見つけて、カラーでふたたび出会えたことに感動しました。ヤクシーとヤクシャは別物ですか。

世界美術全集は、第2回のレジメにあげておいた小学館の『世界美術大全集東洋編 インド』だと思えます。この本が出たのは数年前ですが、インド美術の重要作品がよくまとまっていて重宝します。写真図版もとてもきれいです。授業で使うスライドの写真にも、ときどきここから読み込んだものがあります。図書館や私の所属する比較文化

研究室（文学部）には、他にもインド関係の美術書や写真集がたくさんありますので、ぜひいろいろ見て下さい。また、前にも紹介したように、授業で使っているスライドのファイルは、CD-ROMなどの形でコピー可能で、自宅のパソコンでも見ることができます。ヤクシャとヤクシーは、ヤクシャ(yakṣa)が男性でヤクシー(yakṣī)が女性です。仏教が起こる前からインドで人々の間で信仰されていた神々です。古くから作例が豊富で、仏教美術の影の主役の一人です。

正義である釈迦と悪である悪魔との対立に、力の差を歴然と表しすぎなくらい、表現しているとおもう。見ると、正義は絶対正しく、そして強く、悪は一片でも非があると絶対悪のような気がした。悪が改心して釈迦に弟子入りすることがあってもよいと思うが、存在するのですか。

経典の中には釈迦にまつわるエピソードなど、無数の物語が含まれています。ある学者に言わせれば、人間の考えられる物語で、経典に含まれないものはないそうです。それはともかく、仏典にはさまざまな悪役も登場します。教科書の第7章で紹介するアングリマーラもその一人で、千人もの人間を殺したといわれます（正確には999人）。彼も改心して仏教に帰依します。最期まで救われない悪役としては、デーヴァダッタが有名です。釈迦の従兄弟と伝えられますが、あの手この手を使って、釈迦を攻撃したことになっています。最後は生きながらにして地獄に墮ちたと伝えられています。ただし、デーヴァダッタが本当に邪悪な人間であったかどうかは不明です。むしろ、彼は仏教教団の中の保守派の代表であったとも考えられています。デーヴァダッタは戒律を厳しく定めるという立場をとり、柔軟な傾向のあった釈迦と対立し、釈迦のもとから去るのですが、そのとき賛同者を連れていったために、僧団を分裂させたことが非難されています。仏教とは釈迦が開いた宗教ではなく、釈迦以前にもそれに似たものはすでに存在していて、釈迦はその改革者で、デーヴァダッタが従来からの立場を堅持したという説もあります。こうなると何が本当の仏教であるかが

わからなくなりますが、なかなか興味深い説です。われわれの知っている經典の中の物語は、改革派である「勝利者の歴史」なのかもしれません。

**仏と悪魔ってなんだか変な組み合わせな気がしてしまう。悪魔って西洋のイメージがあったので。仏教でもよく描かれるんですね。涅槃の時の人がいっぱいいるのが、細かくてきれいでした。阿難っていう弟子にちょっと興味を持ちました。愛すべきキャラみたいですね。**

悪魔という呼び方を授業ではしましたが、もちろん、西洋の悪魔とは違います。サンスクリットではマーラと言います。釈迦の物語にしばしば登場しますが、とくに降魔成道と、涅槃の前にある寿命の放棄の場が重要です。ガンダーラのこの涅槃図については、文学部で刊行している『人文科学の発想とスキル』（2004年版）の中でくわしく紹介しています。文学部所属で、このテキストを持っている人は読んでみて下さい。阿難は釈迦の従兄弟で、釈迦の晩年は従者としてつねにそのそばにつき従っています。阿難は出家するときも美貌の妻への思いが断ち切れなかったり、出家した後も別の女性に好意を抱かれたりと、いろいろなエピソードを残しています。また、釈迦の一番近くにいたにもかかわらず、釈迦の涅槃にいたるまで、悟りを開くことができませんでした。仏伝の中では「ボケ役」のような存在で、たしかに「愛すべきキャラ」です。

**日本のマンダラの仏とインドの仏像を並べて比較する図は、わかりやすかったです。日本のマンダラの仏のところ、胎蔵界の前に書いてあった西院というのは、どこかのお寺を指すのでしょうか。西院というのは京都の東寺の中にある建物の一つです。授業で紹介したマンダラはこの西院に伝えられていたので、西院本と呼ばれます。このマンダラは伝真言院曼荼羅とも呼ばれることがあります。これは、宮中で特別な密教儀礼を行う真言院という建物におかれていたという伝承もあったからです。ただし、最近の研究ではこれは否定的です。西院本は現存する最古の彩色曼荼羅で、国宝**

に指定されています。これよりも古いものはインドやチベットにもありません。中国から伝えられたマンダラを写して描いたと考えられていて、中央アジアなどの仏教美術の様式も認められます。異国情緒にあふれ、日本の仏像とはひと味違った、独特の印象を与えます。

**私は小レポートに3章を選びました。1～3の中で一番おもしろかったです。**

授業でも紹介したように、教科書の前半では第3章が一番内容が充実していて、評判もいいようです。授業終了後に提出してもらったレポートでも、1章を選んだ人が多かったようです。それはそれでかまわないのですが、ぜひ一通り読んでおいて下さい。「序章から3章までの一つの章を選んで読み、内容をまとめる」ではなく「序章から3章までを読んで、その中から一つの章の内容をまとめる」のが課題です。後半も同様です。ひととおり読んだ上で「おもしろい」という判断のもとで書いていただけてよかったです。

**私は高校の時に日本史選択だったので、見たことのある仏がけっこうあり、いつもより親しみやすかったです。高校の時から思っていたことなんですが、名前に「金剛～」とつくものと「胎蔵～」とつくものとは、何が違うのでしょうか？私自身、違いがよくわかりません。**

私の高校の時代には日本史も世界史も必修だったので、最近はどちらかしかやっていなかったり、どちらもやっていない人もいるようで、少し不便です。いくらかでも基礎知識があると、ずいぶん違うのですが…。それはともかく、金剛界と胎蔵は日本に伝わるマンダラの中で最も重要なものです。本来は別々の起源を持つのですが、中国や日本では一組のマンダラとして扱われました。いずれも中尊が大日如来なので、区別を付けて、金剛界大日とか胎蔵大日と呼んでいます。もちろん、本来は同じ仏なので、姿はよく似ているのですが、相違点がいくつかあります。また金剛界マンダラの場合、マンダラに含まれる仏たちはほとんどが「金剛～」という名前が付いています。先

週紹介した金剛薩埵もその一人です。二つのマンガラについては、教科書のコラムでも解説していますので、読んで下さい。

日本では仏教が多くの人々に信仰されているが、日本へ来るまでに経由したジャワ島などでも日本と共通する点が見られる仏像が多くあるのですか。たくさんあります。現在のインドネシアではすでにその伝統は消えてしまっていますが、かつてはジャワ島を中心にインドネシアでも密教が栄えた時代がありました。有名なボロブドゥールもその時代のもので、インドからはヒンドゥー教も伝わっていて、インドの神々の像もたくさん残され

ています。東南アジア＝小乗仏教というイメージが強いのですが、その宗教史はきわめて重層的で複雑です。

初転法輪で法輪の両隣にいる動物がかわいいです。これは何ですか。

鹿です。初転法輪が行われたのは現在のサルナートですが、「鹿の遊ぶ公園」という意味の「鹿野苑」（ろくやおん）とも呼ばれます。そのため、古くからの伝統で、法輪の左右に二頭の鹿を描くのです。このイメージは仏教のシンボルとして好まれ、チベットの僧院やマンガラの装飾にも登場します。

## 5. パンテオンの構造

前「仏は男性でもあり女性でもある（中性?）」と聞いたことがあるような気がするのですが、これはインド密教とは関係ない教えなのですか。

狭い意味での仏は「ブッダ」すなわち「悟った人」を意味する男性名詞です（サンスクリットにはドイツ語などと同じように、名詞に性があります）。そのため、ブッダであればすべて男性で、もし女性の「悟った人」であれば「ブッダー」になります（実際はそんな用例はありません）。初期仏教から大乘仏教までは、ブッダはこのようにすべて男性でした。『法華経』の「變成男子」という有名なエピソードは、女性の修行者が最終的にブッダとなるときに、男性に変わるというものです。しかし、密教の時代にはあらたに女性の「聖なるもの」すなわち女尊が登場します。これは、男性の「聖なるもの」に仏、菩薩、明王、天がいたように、仏と同格の女尊や、菩薩に似た女尊など、さまざまなものがあります。明王のように多面多臂の忿怒形の女尊もいますし、もともと、ヒンドゥー教や民間信仰の神々である天のクラスは、女尊の種類も豊富です。ローチャナーやマーマキーなどの明妃はこれらの女尊の中で位の高いもので、仏のパートナーにあたります。仏たちは

人間と同じように、家族に相当するものを構成することがあり、そこでは「仏母」と呼ばれることもあります。また、別のグループとして、「陀羅尼」とよばれる一種の呪文を神格化した女尊たちもいます。「陀羅尼」ということばが女性名詞なので、女尊と結びつけられます。これについては教科書のコラムを参照して下さい。なお、仏教におけるこのような女尊信仰の背景には、インド全体における女神信仰の隆盛が考えられています。

日本とインドの密教美術の比較がおもしろかった。准提観音の蓮の花はきれいですね、古代中国の小説中に、ハスから産まれた子の話があったんですが、ハスには何か意味があるんですか。

ハスはインドの仏教美術における、最も重要な植物でしょう。パールフットやサーンチーの初期の仏教美術にも、ハスの装飾モチーフがたくさん現れます。仏像のほとんどが、ハスの台、つまり蓮台にのっていることもご存じでしょう。浄土教では、極楽浄土に生まれ変わるときに、ハスの中から誕生します。これを「蓮華化生」（れんげけしょう）と言い、極楽浄土図などにも描かれてい

ます。密教の時代でもハスは重視され、マンダラの基本的なモチーフのひとつになります。ハスが重要な植物とされたのはヒンドゥー教でも同様で、寺院の装飾として、やはり好まれましたし、ヴィシュヌという神が世界を創造するときにも、蓮華を用います。インドではハスのイメージは豊饒多産、そして誕生・再生などと密接に結びついています。次回から取り上げる予定の、コスモロジー（宇宙論）やマンダラでも、ハスは重要な役割を果たします。そのときにまたじっくりと考えたいと思います。

**仏の名前は日本では漢字名ですが、その漢字は当て字ですか。それとも意味があるんですか。また、どの時点で漢字名が付けられたんですか。**

意味をとって訳された場合と、音に対して漢字を当てた場合の両方があります。たとえば釈迦はサンスクリットの「シャーキャ」に対する当て字です。大日如来の大日は「ヴァイローチャナ」というのがもとの言葉ですが、この場合は「あまねく照らす」という意味から大日の名があります。当て字でも表記され、毘盧遮那（びるしゃな）とも呼ばれます（密教の立場からは大日と毘盧遮那は別の仏になりますが、もとの言葉は同じです）。明王では不動、大威徳、降三世は意味をとっていますが、軍荼梨は「クンダリン」という語の音から来ています。一般的に、密教の仏は種類が多いので、しばしば当て字の名称が現れます。これに対して、大乘仏教の仏や菩薩は、意味で翻訳されているものの方が多いでしょう（例外として、文殊、弥勒などもあります）。漢字の名称が付けられたのは、その仏を含む経典が中国で翻訳されたときです。同じ仏でも、漢訳した者によって異なる名称が与えられるときもありますので、ややこしいですね。たとえば、有名な観音は観自在とか観世音とも訳されます（この場合、原語が少しずつ違います）。

**明王はどれも恐ろしい姿をしていると思っていたので、穏やかな感じの明王がいるのが意外だった。密教の神話や説話にふれてみたくなった。そのあ**

**との方が、密教美術もおもしろく見られる気がする。仏の世界は釈迦を頂点とするピラミッド形だと思っていたので、そのあたりをもっと知りたい。明王は基本的に忿怒形、すなわち恐ろしい姿をしているのですが、孔雀明王は授業でも紹介したように、本来は女尊なので、柔和な姿で表されます。密教の仏のイメージは、たいていの場合、文献に規定されているので、勝手に変えることは許されません。インドのイメージがよく保持されているのはそのためです。日本では、不動が明王の中で最も人気がありますが、大威徳や降三世などの明王とは不動は少し系統が異なり、インドでは少年のイメージが強かったようです。そのような姿で描かれた不動も残っています。密教の神話や説話を知りたいということですが、密教の仏たちにはほとんど神話がありません。これは教科書を書いたときにも困ったのですが、おもしろいエピソードがあればそれを紹介した方が、読み物としてはおもしろいのですが、密教の仏たちはほとんどが「神話なき神々」なのです。これは、インドの一般の神々、たとえばヴェーダの時代の神や、ヒンドゥー教の神々が、いずれも神話を背景としていることと、著しい対照をなしています。そして、それが密教の仏たちのイメージが人工的に作られた背景であるとも考えられます。このことは、今回の授業で取り上げます。**

**マーリーチーの話の中で、ヴィシュヌの名が出ましたが、密教はヒンドゥー教とどれくらい関係しているのですか。不動明王とシヴァは、どちらも破壊神という位置づけだったような気がします。密教の仏たちはヒンドゥー教の神々と密接な関係を持っています。というより、密教の仏たちは、ヒンドゥー教の神々の世界の中で、はじめて姿や形を持つことができたのです。これについては、教科書を書いたときの基本的な考え方でもありますし、今期の授業の終わりの方でもくわしく見る予定ですので、お楽しみに。そこでは、それまで見てきた密教の仏たちの世界が、まったく別の様相を示すことになると思います。不動とシヴァについては、たしかにどちらも畏怖すべき神（ある**

いは仏)で、世間に流布している仏像入門書などでも、不動はシヴァからできたとか、不動とシヴァは密接な関係があるなどと、しばしば書かれています。しかし、これはまったくのでたらめです。両者の図像上の特徴や、起源、機能などから考えて、不動とシヴァはほとんど関係がないといった方が、正しいのです。世の中には「仏像の常識のウソ」とでもいうものがたくさんあります。私の本や授業では、それをかなり打破しているので、実は、少し仏像のことを知っている人の方が、「目から鱗が落ちる」という感動があります。

**菩薩がまだ修行中だとは思わなかった。じゃあ、弥勒菩薩は仏になれなかったんですか。**

菩薩はまだ修行中です。だからこそ、われわれの救済に尽力してくれているんです。それが彼らの修行であるからです。仏教ではわれわれ衆生(しゅじょう)は、救済されるべき哀れな存在です(そう思っていない人も多いと思いますが)。弥勒は仏になれなかったのではなく、数ある菩薩の中で、これから一番最初に仏になる菩薩です。釈迦の次にこの世に現れて、釈迦の救済に漏れた衆生を、広く救ってくれることになっています。ただし、それまでには五六億七千万年という天文学的な数字の時間があります。一番、仏に近い菩薩なので、弥勒は菩薩形だけではなく、仏の姿でも現れます。スライドの中にも一点、そのような作例を入れておきました。

**降三世明王ってなんて読んでるんですか。ごうざんぜですか。今までごうざんせだと思ってました。私は日本の像よりインドの像が好きです。日本の像でも人間の顔っぽいのより、明王とかの顔の方が好きです。穏やかに下ぶくれした顔っていうのはどうかと思います。なぜ日本の像は顔がふっくらしてるんですか。**

私は「ごうざんぜ」と読んでいます。仏の名前はいろいろ読み方があり、宗派などでも異なるのでやっかいです。授業で紹介した『仏像図典』など

が参考になりますので、見て下さい。顔の表現の好みは人によってさまざまです。「インドの方が好き」という感想はありがたいですが、出席している皆さんの大半は、おそらく日本の仏像の方が好みに合っ、インドの仏像をたくさん見た後に日本の仏像が出てくると、ほっとすると思います。それでも、はじめの頃は異様に見えたインドの仏像が、日本のものともどこかつながりがあり、親しみを覚えるようになると思います。日本の仏像の顔は、たしかに下ぶくれしたものも多いですが、平安初期の密教図像やマンダラの中の仏たちには、驚くほど異国情緒にあふれた作品もたくさん含まれます。また、鎌倉期の慶派の仏像などは、精悍な顔つきで、りりしいという感じ。おそらく「下ぶくれ」のイメージは平安後期の定朝様式の阿弥陀像などから連想するのではないかと思います。日本の仏像にもいろいろあるので、図書館などで見てみて下さい。

**過去仏に興味があります。どういうものがあるんでしょうか。**

仏教とは釈迦が開いたものですから、「歴史的」に見れば、釈迦以前には仏教はないことになります。しかし、「信仰」のレベルでは、釈迦が説いた教え=真理は、時間を超越して存在していたとも考えられます。過去仏はこのような絶対的な法の存在を前提として、釈迦以前にそれを見いだしたものということになります。古い層に属する経典を見ると、釈迦自身も自分の悟りの内容が、すでに以前から存在していて、それを再発見したにすぎないという記述もあります。このような釈迦以前にも教えが存在し、それを説いた仏として、過去仏がいたという信仰は、仏教の初期から見られます。その数は釈迦を入れて七人というのが一般的で、過去七仏といわれます。このほかに、25の過去仏を立てる伝統もあり、とくにその場合、燃燈仏(ねんとうぶつ)という名の過去仏が重要です。

## 6. 画一化するイメージ

弁天が少し出てきましたが、七福神の弁天ですか？七福神はインドと関係あるんですか。仏像を実際に作る人たちは自分の知識をもとに作っていたのでしょうか。誰かに依頼されたんでしょうか。七福神はインド、中国、日本の神々の寄せ集めです。インド起源の神は弁財天、大黒天、毘沙門天、中国起源は福祿寿、布袋、寿老人、日本が恵比寿です。大黒天はインド起源ですが、その姿は大国主の尊（因幡の白ウサギで有名）の影響があり、インドの大黒（マハーカーラ）とは異なります。後の質問については、どちらも正しいです。日本の仏像を考えた場合も同じですが、仏像を作る仏師はそれを商売にしているわけですから、依頼を受けて制作します。また、仏師は職人なので、自分の師匠から受け継いだ知識や技術を持っています。しかし、密教の時代のように、新しい仏が経典の中に次々と誕生した場合、自分の受け継いだ知識だけでは、対応し切れません。そのような場合、僧侶などが具体的なイメージについてアドバイスのこともあったのではないかと思います。一般的に、図像のイメージについては文献が先行し、作例は保守的な傾向があります。このことは教科書でも授業でも強調していますが、仏像を作る人にとって、新しい仏のイメージは、必ずしも制作できるものばかりではないのです。

今までの仏像はあまり色が使われていなかったけど、明王は黄色とか赤色とか使われていて、激しいイメージが出ているなあと思いました。五劫思惟阿弥陀はかわいいなあと思いました。あと仏像にも見返りがあるのにびっくりしました。

不動明王は一般に青黒い色で描かれますが、作品によっては特定の色が用いられる場合があります。授業で紹介した園城寺の黄不動は、その名の通り、体の色が黄色いことが特徴です。この作品についてはあまり詳しく説明できませんでしたが、日本の不動明王の中でもとくに重要な作品の一つです。

天台宗に円珍（えんちん）という高名な僧がいますが、この像はかれが修行中に現れた不動の姿を描いたと伝えられます。そのような宗教体験の中で得られたイメージのことを感得像（かんとくぞう）と言います。ふつうの不動とは異なる黄色であることも、このときの不動が金色に光っていることによります。それ以外にも一般の不動には見られないいろいろな特徴をそなえています。不動には黄不動に加え、京都の青蓮院の青不動、和歌山・高野山の明王院の赤不動と、三色そろっています（信号みたいですが）。五劫思惟阿弥陀は多くの方が「変わってる」「おもしろい」などの感想を寄せました。日本の仏像の中でもユニークなものです。見返り阿弥陀も印象的だったようです。インドの仏像にはこれらに類するものはなく、比べると地味なような感じがします。なお、五劫思惟阿弥陀の説明で「床屋に行かなかったから」と言いましたが、これはわかりやすいように言っただけで、もちろん仏は床屋などには行きません。五劫というとても長く長い時間の間、修行を続けたため、髪の毛である螺髪が異常に伸びたということです。

**仏の数がとても多く多いです。とくに賢劫千仏。話を聞いていると、その全部に名前があるようで…。本当に全部に名前が付いているのですか。**

本当です。ただ仏の名前だけを列挙したお経があります。『過去莊嚴劫千仏名経』『現在賢劫千仏名経』『未来星宿劫千仏名経』というのがそのタイトルです。このようなお経を仏名経と言います。賢劫千仏は金剛界マンダラのまわりにも描かれ、密教の時代にも重要な存在であったことがわかります。これについては実際にマンダラを見るときに紹介します。

**動物に乗るといのは何か意味があるのですか？動物の世界を支配しているとか。**

動物の世界を支配しているわけではありません。また単純にひとつの理由があげられるわけではありません。梵天がハンサという鳥、帝釈天が象というのを授業では紹介しましたが、仏教の仏たちでも、文殊が獅子、普賢が象などが有名です。教科書の2章ではマーリーチーと猪、第3章では大威徳明王と水牛というつながりを軸に、さまざまなイメージを追っています。また、第7章では足の下に踏まれる存在が、単なる敵対者ではなく、そのイメージの源泉であるという事例を紹介しています。このことは、授業の最後の方のテーマともなります。

五劫思惟阿弥陀すごいですね。伸びすぎだー。床屋くらい行こうよ。この像とか見返りの像は日本だけですか。昔の人は想像力すごく豊かだなと思います。十二神将ってバサラとかのやつですよ。彼らはどんな階級に当たるのですか。半跏思惟像。日本史で覚えました。だって何度もテストに出るんですけど。火天、水天、風天…元素みたいなのを司るのって、この三つだけなのですか？中国の五行にも西洋の四大元素にも足りませんよね。これってどういう理由からなのでしょう。

五劫思惟阿弥陀も見返りの阿弥陀も、インドにも中国にも類例はありません。日本独自の阿弥陀の表現でしょう。日本仏教は平安後期から浄土教の影響が大きくなり、浄土図や来迎図などのさまざまな浄土系の絵画が現れます。その起源は中国の敦煌などにも見られますが、日本にしか見られない形式もあります。日本史などの知識として仏像を覚えた人も多いでしょうが、実際に見る機会を持つことが、この分野では重要です。寺院や展覧会などで感動とともに直接仏像に接すると、忘れることはありません。火天、水天、風天はいずれもヴェーダの時代から信奉されているインドの神々です。ヴェーダというのは紀元前1500年頃にインドに入ってきたアーリア人が有していた宗教文献群で、その中には神話が多数含まれています。帝釈天であるインドラもその主役の一人ですが、アグニ（火天）、ヴァルナ（水天）、ヴァーユ（風天）も重要な神々です。それぞれの名前の通

り、アグニは火、ヴァルナは水、ヴァーユは風と密接なつながりを持っています。しかし、物質や自然現象である火、水、風を神格化したわけではありません（わかりにくいかもしれませんが、火や水などがそれぞれそもそも神なのです）。なお、元素を表す地水火風はこれらと同じように見えますが、水はもとのサンスクリットでアープ、火はテージャスで、異なる用語を用います。これは物質としての水や火を示します。サンスクリットを含むインド・ヨーロッパ系の言語では、火と水は「命あるもの」と「命のない単なる物質」の2種類が区別されることがあります。前者を神の名称として用い、後者を物質名とするようです。ただし、四大元素の中でも風は同じヴァーユで、地はプリティヴィーと言います。プリティヴィーも神の名前になっていて、地神と訳されます。

弥勒が将来、確実に仏になるとすでにわかっていて、多くの信仰を集めているが、弥勒にとってはまだ先の話なので、プレッシャーがかかっているからだろうか。パンテオンの構造で、仏のグループの守護尊の「秘密集会」が気になった。怪しい…。お地藏様は仏のどういう部類にはいるのだろうか。日本人にとっては一番身近な存在であるのに、あまり知らないなあと気づいてショックだった。

弥勒はみずから次の仏になると宣言したようになっていて、プレッシャーは覚悟の上でしょう。現在は兜率天という天上世界にいて、出番を待っているはずですが、兜率天は釈迦も地上に降りる前にいたところで、仏が現れる前に待機している所です。弥勒に対する信仰は日本を含めアジア各地で盛んでした。釈迦が涅槃に入ってからつづく仏のいない時代が、弥勒の登場によって終止符が打たれるのです（それが、いかに遠い未来であっても）。一種の救世主です。日本では弘法大師信仰が弥勒信仰と結びついたり、さまざまな展開があります。「秘密集会」は「ひみつしゅうかい」ではなく「ひみつしゅうえ」と読みます。「隠された集まり」という意味ですが、残念ながら、何かをやる集会ではなく、仏たちの集まりという意味

です。ただし、密教経典には「あやしい集会」や「あやしい実践」を説くものも多く、「秘密集会マンドラ」を説く『秘密集会タントラ』にもそのような内容が含まれています。なお『秘密集会タントラ』はインド密教史の中でも重要な位置を占める経典ですが、最近全訳が発表されたので、簡単に読めるようになりました（松長有慶 2000 『秘密集会タントラ和訳』法蔵館）。地蔵はたしかに日本人にとって一番身近な仏の一人ですが、どのような仏であるかをきちんと説明できる人は少ないでしょう。菩薩の一人で、インドでも信仰されていたことがわかっていますが、我々の知っている地蔵のイメージは中国形成されました。とくに地獄の救済者としてののはたらきが重要で、地獄や輪廻思想の浸透とともに、広く信仰されるようになります。日本では今昔物語や日本霊異記などの霊験説話として民間に流布したようです。さらに道祖神のような道や境界の仏としても重要です。菩薩でありながら比丘形（びくぎょう）、すなわちお坊さんの姿をとることも特別です。『地蔵菩薩發心因縁十王経』（じぞうぼさつほっしんいんねんじゅうおうきょう）というお経が地蔵に関する重要な経典です。

**守護尊をたくさん見たいです。守護尊なのに仏や明王に近いとはどういうことなんですか。見た目か？**

守護尊とは伝統的な呼び名ではなく、最近の研究者による便宜的な名称です。インド密教では時代が降るとそれまでには全く信仰されていなかった仏たちが登場します。ヘーヴァジュラ、サンヴァラ、カーラチャクラ、グヒヤサマージャなどです。これらの仏たちは、それまでの仏と異なり、多面多臂で明妃を伴い、ヒンドゥー教の神を足の下に踏みつけるようなすさまじい姿をとります。はじめの頃にお見せしたヴァジュラバイラヴァもその一人で、無数の手や足、そして顔を持ち、足の下にはさまざまな者たちを踏みつけています。このような仏が出てきた時代には、すでに中国はインドから密教を導入する熱意を失っており、日本にもほとんど伝わっていません。彼らの名前が漢語

ではなくカタカナで表記されるのはそのためです。守護尊は基本的に仏（如来）に匹敵するかそれ以上の位にあるのですが、それを表すためにも仏とは全く別の姿をとるのです。そのときのイメージのもとになったのが、明王や菩薩、あるいはヒンドゥー教の神々のイメージだったのです。「見た目」というのは当たっています。

**神々の名前を学んで、よりそれぞれの神を意識して見られるようになった。何で、こんなにいっぱい神は生まれたんだろう。一人の絶対的な神的な発想にはならなかったの？**

皆さんにとって、これらの仏たちはこれまでにはほとんど無縁の存在だったと思いますが、名前とイメージが結びつくようになると、内容の理解も進みます。一人の絶対的な神的な発想の登場は、この後の授業で取り上げていきます。ついではながら、しばしば宗教にたいして一神教と多神教という分類を行うことがあります。たとえば、イスラム教やキリスト教は一神教で、日本の神道やヒンドゥー教は多神教であるといった具合です。さらに一神教は不寛容で暴力的であり、多神教はすべてに神や魂が宿るといった発想なので、寛容であるという評価までも加わります。このような分類は一見、わかりやすいようですが、実際はそれほど単純ではありません。キリスト教でも多神教的なところはありますし、ヒンドゥー教もすべての神は一人の神に収斂するというような考えが基本にあり、その限りでは一神教です。宗教の二極化とそれに対する評価は慎重にしなければいけないと思います（最近のイラク戦争などを見ているととくに）。

**弥勒菩薩が現れる 56 億 7 千万年という数字は、どこから出てきたんですか。また、何か意味があるんですか。**

これにはかなり長い説明が必要です。弥勒が今いるのは兜率天（とそつてん）という天上世界です。ここは地上から数えて、4 番目の天に相当します（仏教の宇宙論については次回取り上げます）。これらの天にはそれぞれ神々が棲んでいます

(彼らのことを本来、天と呼び、その住むところも天と呼ばれます)、それぞれの世界で、一日の長さや寿命が異なります。基本的にひとつ天を昇るたびにこれらが倍になります。まず、はじめの天は四天王天と言って、その1日の長さは人間世界の50年に当たります。四天王天の上の三十三天は一日が人間世界の100年、以下、この法則で、兜率天の1日は400年に相当します。もう一方の寿命は、四天王天の神々の寿命が、その天の時間の長さで500歳、これも順番に倍になり、兜率天の神々の寿命は4000歳になります。1月が30日、1年が12ヶ月で計算すると、四天王天の寿命は、人間の世界の時間の長さに換算すると、9百万歳、三十三天では一日と寿命がそれぞれ2倍になるので、全体では四天王天の4倍となり、これを繰り返すと、兜率天では9百万の64倍の5億7千6百万歳となります。これが兜率天に住む弥勒にも適用されて、弥勒が天寿を全うして、われわれの世界に生まれ変わるまでには、5億7千6百万年

かかるということです。ちなみに、弥勒のように次に仏になることが決まっている菩薩は、かならず寿命の最大の長さまで生き、途中で死ぬことはないことになっています。さて、ここで現れた5億7千6百万年という数は、授業で紹介した56億7千万年よりも一桁近く小さい数です。これは、5億7千6百万歳が数字の順序にひきずられて、5億6千7百万歳となり、さらに一桁ずれたからです。一桁ずれた理由は、この数字を説く経典では位どりを表す言葉として、一、十、百、千、万と進んでいく途中で、千万が抜けていたらしく、そこでわれわれの使う位どりの言葉と一桁ずれるということです。以上は、最近読んだ下記の論文でくわしく書いてありましたので、紹介しました。教科書では一桁ずれることだけ簡単に触れていますが、数字の順序が変わることなどについては言及していませんので、補っておきました。

吉野恵子 2004 「弥勒菩薩下生年代考」『東方』19: 82-93。

## 7. 画一化するイメージ (続き)

今日は動物が少なかったですね。マンガースとカルラくらいですね。不動明王の後ろの炎が鳥だったとは。迦楼羅…すてきな名前ですね。ガルダともおっしゃっていましたが、ヒンドゥー教でヴィシュヌがのっていたりする鳥ですか。ヒンドゥー教の豊かなイメージで着飾っているという印象を受けました。文殊立像(パトナ博)の足が何だかロボットみたいに見えます。太くてすんとして。立像で足に入れ墨みたいな模様があるものがあったのですが(ひざ上に)あれも装身具なのですか。それとも入墨?

カルラはそのとおりで、ヒンドゥー教の神であるヴィシュヌの乗り物の鳥です。インドネシアの航空会社にガルダ航空というのがありますが、ここからとられています(インドネシアにもヒンドゥー教は伝わっています)。密教の仏たちのイメージの源泉は、しばしばヒンドゥー教の神にあり、

それを視野に入れて考える必要があります。これは授業の最後のテーマとなります。なお、迦楼羅炎をともなう不動は、十九相観と呼ばれる形式のものに限られ、すべての不動にあるわけではありません。文殊立像を含め、この時代の仏像には、しばしば硬直した動きの乏しいものが見られます。グプタ期までのインド美術が、生き生きとした躍動感や、深い瞑想性を感じさせるのに対し、パーラ朝の仏像の多くは、装飾過多となる一方、形式化が進みます。これも画一化への動きと関係づけられるかもしれません。足の模様は身につけている衣装の文様だと思います。インドの仏像はしばしば体に密着した衣装を付けているので、衣そのものがはっきり表現されず、文様のみが刻まれます。入墨をした仏像はおそらくインドにはないと思います。

持物の中に人間のどくろで作った鉢があったけれど、救ってくれるはずの仏たちが、人の骨を器にしていると、どっちかという不幸にさせられそうです。どうして人骨を器として持たせるのでしょうか。画一化が起こったのは、すべての仏がひとつになって、キリスト教みたいな絶対神として考えられるようになったからかなとも思いました。どくろの棒やどくろの杯、あるいはどくろを二つくっつけて作った太鼓などは、一部の密教の仏たちが手にします。たしかにこれは、私たちの持つ仏のイメージとはずいぶん異なりますが、明王系の仏たちもそなえていたグロテスクさにつながるものです。チベットになりますと、さらにこのような仏たちは増えます。このようなイメージにもヒンドゥー教の影響があり、カーリーと呼ばれる女神は、手にしたどくろの杯で、その中に入った血を飲む姿で描かれます。カーリーとは本来、死を司る神ですが、中世インドでは強力な女神として、人々の信仰を集めました。この女神が持つ骨や血は、インドでは本来、不浄なものともみなされ、ヒンドゥー教でも古い時代には神の像などには現れませんでした。カーリーが骨や血を持つことの解釈はいろいろありますが、私は生命力の表現方法の一種だと思います。とくに、女神がこのような姿をとることが重要です。女神は母神とも呼ばれ、われわれを生み出す源なのですが、それだからこそ、その生命力の象徴である血をコントロールすることが可能なのです。インドにおいて、死の神は生を生み出す神でもあるのです。これについては以前に書いたものがありますので、関心のある方は私のホームページで読んでみてください。イメージの画一化と絶対的な仏の登場は、歴史的に見れば順番は逆で、大乘仏教において絶対的な仏の登場と仏の多様化があり、さらに密教の時代になり、それぞれの仏のイメージを実際に表現するに当たり、イメージが画一的になったようです。ただし、多くの仏の登場と、それを統括するような絶対的な仏の登場は重要で、教科書でもはじめの方で取り上げていますし、これからの授業のテーマであるコスモロジーにも関連します。

ヒンドゥー教の神のイメージを密教の仏に利用したということには驚いた。他宗教の神を利用することに抵抗を感じなかったのだろうか。仏が画一化されていくとインパクトがなくてぱっとしないなあと考えた。密教が衰退したのもなんかうなずける。チベットの十忿怒尊は間違い探してみたいだった。

おそらくそれほど抵抗を感じなかったと思います。この時代の仏教にとって、ヒンドゥー教の存在は圧倒的だったはずですが。はじめの頃は、降三世明王に見られるように、ヒンドゥー教の神を敵対者として位置づけましたが、次第にヒンドゥー教の神と変わらない姿の仏たちも登場するようになります。画一化が進みインパクトがなくなるのは、私自身もそのように思っています。ただし、授業でも最後に言ったように、チベットではこのような仏のイメージがしっかり定着し、膨大な数の仏たちをかかえたまま、現在まで存続しています。インドや日本とは異なる「聖なるイメージ」のあり方が、この国にはあったようですが、すでにそれはインドで準備されていたと考えると、画一化という見方もひょっとしたら一面的であるのかもしれない。むしろ、同じイメージをそなえた仏たちが、グループとしての結びつきを強固にしたと見ることも可能です。このような点も含めて、以前に十忿怒尊のイメージをアツかった文章を発表したことがあります。大学図書館にもありますので、関心がある人は読んでみてください（授業で紹介した図版も載っているので、間違い探してもできます）。

森 雅秀 1991 「十忿怒尊のイメージをめぐる考察」『仏教の受容と変容 3 チベット・ネパール編』（立川武蔵編） 佼成出版社、pp. 293-324。

弥勒は僧の家で水を持っていると言いましたが、もうひとつの社会階級は何を持っているんですか。弥勒はバラモンの家に生まれると経典に説かれているので、古い時代の作品では、出家者や苦行者のイメージをそなえています。アーリア人で構成されるインドの社会階級は、古くから司祭、戦士、庶民という3つに分かれ、ここからいわゆるカー

スト制度のバラモン、クシャトリア、ヴァイシャへと発展していきます。もうひとつの階層であるシュードラは被征服者に起源を持つものなので、アーリア人たちとは本来別のグループです。神々もこのような社会階層に対応することがあり、梵天（ブラフマン）は司祭、帝釈天（インドラ）は戦士のイメージを持っています。そのため、ブラフマンも水瓶を持ってしばしば表されます。一方の帝釈天は武器である金剛を手に入れます。仏教は本来、このような社会階層とは関係がないのですが、私たちのイメージ形成として、同じような傾向が認められます。その場合、弥勒は司祭（僧侶）で、これに対して観音がどちらかという戦士階級に対応します。ただし、観音は蓮華を持つことが一般的で、武器を持つことはあまりありません（不空罽索観音のような密教の変化観音は別です）。

今まで仏像を見るときはあまり意識していなかったが、とくに「阿弥陀の九品来迎印」にあるように、手の表現方法が細かくわかれているのに驚いた。指一本の組み合わせにも大きな違いがあることが不思議に感じた。

阿弥陀の九品来迎印は、浄土教の信仰において、9種類の往生の方法が説かれ、そのひとつひとつで、来迎する（つまり往生する使者を迎える）阿弥陀の手の形が異なることによります。インドでは浄土経系の美術がほとんどなく、実際に9種の来迎印が現れるのは中国と日本です。密教の仏たちの手の形はかなり固定していて、それが各仏がだれであるかを見分ける根拠になります。授業でも説明したように、印以外の身体的な特徴がほとんど同じになるからです。その一方で、僧侶の方も手で印を結ぶようになります。それぞれの仏の手の形を、自分でも作り、その仏と一体になるような修行をすることもあります。また、特定の供物をそなえるかわりに、それを手の印で象徴的に示すようなこともあります。密教の実践法で印は重要な役割を果たすのです。

僕たちは仏像は拝むものだという認識が知らず知

らずのうちに刷り込まれていたけれども、最初は聖なるイメージなどが感じられて、はじめて人々はそれを拝むことができるんだと思った。

授業で説明したこともそういうことです。聖なるイメージとは長い時間をかけて、さまざまな文化的背景の中で形成されたものですが、密教ではそれを安易にしかも大量に行ったようです。われわれは仏像を博物館や写真集で簡単に見ることができますが、当時の人々は、はるばる寺院を訪れ、敬虔な気持ちでこれを拝んだはずで、場合によっては、秘仏として、簡単には見ることができない像もあったでしょう。聖なるイメージはこのような場面で、必ず求められる条件です。ただし、そのようなイメージとして万国共通の絶対的なものがあるのではなく、文化や民族、風土などによって、さまざまなイメージが存在します。われわれにとって異文化であるインドのような国で、それがどのように形成されたかを考えることが、この授業のねらいのひとつです。

化仏や仏面は仏様の分身なのだろうか。どうして仏様は坐っている像ばかりで、観音様は立ち姿が多いのだろうかと思った。降三世明王は足の下に二人の神様を敷いているので、その恐ろしさを表現するのには十分だと思った。「初転法輪に向かう釈迦」で法輪が三つもあって、いいのだろうかと思った。五仏や八大菩薩など、パッと見た目にはほとんど同じ像がならんでいるのは、まるで日本の七地蔵ぼくってかわいらしい。いろんな仏像を見てきたが、実際の大きさがわからないので、いまいち感覚がつかめない。

化仏は観音の頭についている阿弥陀がよく知られていますが、この場合は観音と一番つながりが深い仏ということで、現れます。光背におかれた仏も化仏と呼ばれますが、これはいろいろで、たとえば薬師の場合、七仏薬師と呼ばれる7体が現れます。これはたしかに分身のようなものです。坐像と立像の登場頻度の違いですが、たしかにパラ期には仏であれば坐像が多く、立像は比較的小さいようです。ただし、ラリタギリというオリッサの遺跡からは、たくさん仏の立像が出土してい

て、地域差があるようです。観音と坐像の関係も同様で、地域ごとに好みが別れ、さらに、腕の数などの図像上の特徴とも、坐像と立像があらわれる割合は関係するようです。「初転法輪に向かう釈迦」の法輪が三つであるのは、仏、法、僧という仏教でもっとも大切なもの（三宝）を表すからです。このようなシンボルを三宝標と呼びます。日本の七地蔵（おそらく六地蔵の方が一般的）も、たしかにクローン人間のようなのですが、これは六道輪廻の世界で苦しむ生類を救う役割を彼らが果たしているから六体です。なお、このような地蔵信仰はインドにはさかのぼれないので、インドには同じ姿をした地蔵はありません。仏像の大きさはそのとおりで、スライドではすべて同じ大きさになってしまいます。実際の作品を見るのが一番ですが、写真集などでは大きさが書いてある場合もあります。授業で紹介することが多い単独の彫刻は、等身大かそれよりもやや小さいものが多いです。

本の5章と4章読みましたが、まとめにくかったです。7章にしようかなと思いました。少年の神様の話が、今のところ、一番おもしろかったです。

降三世明王、やっぱりかっこいいです。あの火炎光がいいです。蓮の花って横から見るときれいだけど、中をのぞくとびみょうに気持ち悪いですよね。本物の花弁のついたものは見たことないのだけど、花が落ちて種子みたいなのができたのは見たことがあります。でっかいタネがぼこぼこついていて、あっこれが多産を表すのかぁとおもいました。

宿題のレポートはがんばって下さい。一通り読んで、まとめやすそうなところを選んで下さい。蓮の花はたしかに中のところが気持ち悪いです。私も以前はそう思っていました。授業でときどき取り上げるので、今では慣れてしまいましたが。インドでは古くから蓮華がシンボルや装飾モチーフとして好まれました。とくに仏塔の装飾として描かれる場合は、蓮華蔓草（れんげつるくさ）といって、茎が縦横に伸び、花もいくつも咲きこぼれています。これはわれわれのハスのイメージとは少し異なるのですが、生命力や繁殖力をそのまま表現したかのようです。ハスのイメージはコスモロジー、つまりインドの宇宙論でも重要です。今回からもまた登場するので、我慢しておつきあいを。

## 8. 仏教世界観

「小世界概念図」を見て思ったのだが、仏の世界のランクがやたらと多いことに驚いた。自分は何となく地獄のランクと仏の世界のランクの数は1:1くらいだと思っていたので。自分たちが生きている人間世界のランクを真ん中くらいにしないところがおもしろいというか、すごいと思った（普通は人間を世界の真ん中にするような気がする）。

須弥山の上の多くの階層はまだ「仏の世界」ではなくて、天、つまり神々の領域です。天も六道輪廻の生まれ変わりのひとつで、寿命が尽きれば他の生まれ変わりとなって輪廻します。天、人、修羅、餓鬼、畜生、地獄という輪廻の領域は、三界

すなわち欲界、色界、無色界ですが、三つ目の無色界はものが存在しない世界で、意識とそれが活動する空間があるのみです。ここは仏となるための修行をする者の、最終的な段階となります。仏の世界はこのような迷いの世界とは無縁で、それを超越します。そこはわれわれが存在するような空間や、われわれが生きる時間などとは異なる次元なのです。したがって、このような仏の世界はわれわれには認識することも、表現することもできないのですが、それをあえて目に見えるようにしたのがマンダラです（マンダラについては次回の授業で取り上げます）。なお、天も六道輪廻の中の生まれ変わりのひとつなので、人間よりもま

しな存在という程度なのですが、これは輪廻思想が定着し、神々を仏よりも低いレベルにおいた結果です。もともと古代インドで信奉されていた神々は、このような輪廻思想とは無関係でした。人間の世界が世界の中心にないということは、たしかですが、地獄にもかなり階層があり、しかも天と同じように、下に行くほど広がったり、時間がゆっくり流れています。世界の中心を須弥山とすると、水平方向にも、垂直方向にも、この山を中心としたイメージとなっています。

千とか万とかスケールが大きすぎると思いました。どれだけたくさん世界があるんだ…。でも、数の増え方が規則的で、とても数学的で、さすがインドだと思いました。須弥山はたくさんあるんですね。別の講義で「世界の中心」だといっていたので、ひとつだけかと思っていたんですが（でも世界がたくさんあるのだから当然か…）。

前回説明したような世界観が、インドで突然できあがったわけではなく、徐々に形成されました。初期の世界観はもっとプリミティブなのですが、『俱舎論』という文献に説かれる世界観は、その一つの完成形態で、おそろしく精緻なものです。ご指摘のように、おそらく数にこだわるインド人ならではでしょう。古代の日本人がイメージする世界や宇宙とはまったく異なります。『俱舎論』の段階では須弥山はひとつだけで、それを中心に世界が構成されています。ですから別の講義のお話も正しいのです。しかし、『華嚴経』や『法華経』などの大乘経典が登場すると、このような伝統的な世界観を極小にまで縮め、無数の世界を作り出しました。『華嚴経』の蓮華蔵世界はその代表的なものです。世界がひとつか無数かというのは、仏教の歴史においても重要な意味を持つのです。

今日の講義はむずかしくて分かりにくかったです。小世界を千個集めたものが中世界になるということでしたが、小世界千個の集合体の中世界なのでしょうか。それとも小世界千個の上に中世界があるのでしょうか。

先回の授業のコメントには「よくわからない」というものがかなりありました。今回、もう一度、簡単に説明するつもりです。小世界から上の説明も不十分だったようで、中世界の大きさが小世界の千倍ということです。小世界の中でも、上に行くほど天と天の間は広がっていくのですが、小世界を越えると、その広がり方が爆発的になるのです。これを私は「頭でっかちの宇宙」と呼んでいます。これは空間だけではなく、時間についても該当し、ひとつ上の天に行くたびに、時間はゆっくり流れるようになります。天に住む神々はこのゆっくりした時間の中で生き、さらに寿命も伸びます。このように人間と神々を異なるレベルにおく考え方は、仏教のオリジナルではなく、インドで古くから信じられていたことのようにです。

仏教世界の広がり大きさには驚いた。あと、以前習ったパンテオンの構造と、今回との結びつきがわからなかった。大仏＝大日如来ですか。

パンテオンの中に登場する神々のうち、仏は上にも述べたように、本来はわれわれの世界から超越した存在です。菩薩はまだ仏になっていないので、この世界に属しますが、迷いの世界にいるわれわれを直接救うため、人間世界や場合によっては地獄も活動の場にします（後者は地蔵が有名です）。また、弥勒は兜率天に住んでいますし、釈迦も地上に降りる前には同じように兜率天にいたことになっています。天部の神々が天に住んでいることは、もうおわかりだと思います。また、修羅は六道のひとつになりますが、天部の神に含まれていました。なお、仏教世界観の説明は、パンテオンについての情報とともに、次のマンダラのための予備知識となります。大仏は正式名称が毘盧遮那仏でサンスクリットのヴァイローチャナから来ています。密教の大日如来も同じ名称、もしくは「大きい」を意味する「マハー」（摩訶）を付けて呼ばれ、明らかに同じ起源をもつ仏です。しかし、密教では伝統的な毘盧遮那よりも、大日如来の方が格が上とみなされています。

自己と世界について、昨年度とっていたインド思

想史という授業でいろいろと考えさせられました。世界（周囲）から認められてはじめて自己（私）が存在し、また逆に自己が認識してはじめて世界が存在する。自己と世界は根底ではつながっている（梵我一如）という考えなど、とつてもむずかしいけれど、仏教の思想、そこから広がる美術の世界など、奥が深いなぁと思いました。

インドの思想の基本にあるのが、ウパニシャッドという古代の哲学的な文献に説かれる「梵我一如」の思想です。おそらくこの言葉は高校の世界史などでも登場するので、知識としては知っている方も多いでしょう。しかし「宇宙と自己とは本来は同一であると古代のインド人は考えた」という説明を見ても、ほとんどの人は「へえ、そうなの」というだけで終わってしまうのではないのでしょうか。先回の授業ではじめに考えてもらったのは、世界（宇宙）と自己とが無関係に存在するのではなく、しかもその境界はきわめてあいまいであるということです。現代的な視点からすれば、環境問題でしばしば言われる「地球はひとつの生命体」という考え方ともつながります。地球に乗っている無数の命がひとつの集合体であるならば、地球を含む宇宙もひとつの生命と見てもいいわけです。インドでは何千年も前からこのような思想を発達させてきたところなのです。コメントにある「世界を認識する自己」という考え方も、たしかにインド哲学では重要です。その一方で、自己の存在のためには時間軸も考慮する必要があるでしょう。たとえば、昨日までの記憶がまったく存在しないとすれば、おそらく「私である」とは思えないでしょう。教養のインド思想史の授業は今年度も後期に開講される予定です。シラバスを見ると「世界と自己」の関係をじっくり講義されるようです。関心のある人はどうぞ受講してみてください。

今まで奈良の大仏を実際に見たことがなかったので、ハスの花のところにあのような絵が彫ってあったなんて知らなかった。それを知って、改めて大仏が素晴らしい建造物であるなぁと実感した。仏や釈迦といえば蓮というイメージがあり、実際

に蓮が描かれていることが多いですが、どうして蓮の花なんだろうと思った。菊もよく仏教と関わりがあると思うのですが。

奈良の大仏の蓮弁は直接、間近で見ることができないので、ほとんどの観光客はその絵に気づかないのですが、授業でも紹介したように、レプリカが見られるところにおいてあり、簡単な説明が加えられています。機会があれば見て下さい。授業でもお見せした真上から撮った写真で見ると、大仏がすわっている蓮の種の部分もはっきりと表現されているのがわかりますが、これも普通の観光客には見ることができないのが残念です。蓮がなぜ重要であるかは今回の授業で取り上げます。菊はたしかに日本の仏教では重要な花です。古くは飛鳥時代から装飾文様としてあったようですが、平安時代から鎌倉にかけて、蓮よりも好まれるようになります。美術史家の若桑みどり氏は、このような変化について「天地豊穡の象徴であった蓮は、力と権威のシンボルである菊に取って代わられた」と要約しています（『薔薇のイコノロジー』青土社）。

日本には東大寺の大仏など、大仏がいるけど、インドには大仏に相当するような大きな仏像はあるのですか。

インドには仏教の巨大仏はありません。ヒンドゥー教やジャイナ教の神の像でかなり巨大なものがありますが、これはほとんど近現代の制作です。大仏の思想的な根拠である法身仏という考え方は、インドで成立したもので、大仏があってもいいのですが、巨大な像を造るという考え方は、あまり好まれなかったようです。一方、いわゆるシルクロードでは巨大な像が流行しました。数年前にタリバンによって破壊されて有名になったバーミヤンの大仏もその一つです。高さは奈良の大仏の3倍ほどあったようです。中国でも雲崗や龍門で大仏が作られています。日本の大仏はこの流れの最後に位置づけることができます。

お釈迦様がお経を読むとき、準備体操をすると知って驚いた。

準備体操というのは「たとえ」です。大乘仏教の経典の多くは、はじめの部分に仏の神変（じんべん）が説かれます。授業で紹介した『法華経』もその一つです。神変とは宇宙的な規模で起こる奇跡なのですが、これから経典を説くという段階で、必ずこの神変が起こるのです。神変の内容は、まずはじめに仏が三昧に入ります。その結果、地震が起こって世界が柔軟（？）になり、さらに釈迦の白毫から光が発せられて、宇宙全体が照らし出され、すべての仏の世界を目の当たりにすることができるとか、釈迦の舌が宇宙全体を覆う（ちょっと気持ち悪い？）とかが起こります。これによ

って、世界が仏の説法を聞くためにふさわしい状態になると説かれています。具体的には、世界は「浄土」となり、そこに住む衆生（つまりわれわれ）は、悟りに到達することが確約されることとなります。（日本の浄土教で説かれる他力の起源をここに求める研究者もいます。）このような出来事を神変と呼び、さらに仏によって法が説かれること自体も神変とみなされます。それほど大乘の経典に説かれている教えはすばらしいということになるわけです。「準備運動」といったのは、このような状態になることで、別に釈迦がストレッチをするとかいうことではありません。

## 9. 再生する世界

ストゥーパが表現しているものが水だったと知って、少し驚きました。やはり、仏のこととかを示しているものだと思っていました。足が魚だったりするのがおもしろかったです。はじめに先生が言っていた癒されると言うのが、最近少しずつわかってきた気がします。最後の「世界は卵」と表せるというのは、はじめの課題に出たキーワードのプリントにもあった気がして、想像というか、理解まではいかないけれど、何となくわかりました。

ストゥーパの全体が水を表しているわけではなく、ストゥーパの装飾に水にかかわるものが数多く現れることに注目しています。現在では残っていませんが、まわりの地面に青いタイルのようなものを敷いた例もあるそうです。前回から今回にかけて、ストゥーパがこのように水に覆われていることから、ストゥーパがもつ意味を考察していきます。そのときのイメージとして「卵」を出したのは、もっともわかりやすい「生命」のシンボルであり、さらにストゥーパの形態そのものが、卵に似ているからです。ストゥーパの中におさめられている舍利、つまり釈迦の骨も含めて、今回、もう少ししていねいに説明するつもりなので、「何となく」ではなく「そうなんだ」とわかって欲しい

と思います。（あまり「癒される」話ではないと思いますが）。

分舍利はどこか日本の分骨に似ていると思った。舍利を8つに分けたとあったが、そのような聖なるものをバラバラにしてしまってよいのだろうか」と疑問に思った。原型をどんどん失ってしまっただけで、聖なるイメージがなくなってしまうのではないかと思った。

「舍利」はサンスクリット語の śarīra「身体」から作られた言葉で、とくに仏の遺体を指して用いられます。先回の授業でもお話したように、仏教の場合、ストゥーパの起源は釈迦の遺体を荼毘（だび、火葬のこと）にした後、その遺骨を分割して、それを納めるために建てられたものです（もっと古い時代からあったという説もあります）。したがって仏塔には必ず舍利が納入されていなければなりません。マウリア朝のアショーカ王の時代には、さらに各地に仏塔を建てるために、すでに納められていた舍利を仏塔から取り出し、こまかく分割したと伝えられます。玄奘は『大唐西域記』の中で、インドや中央アジアの各地に仏舍利を納めた仏塔があることを伝え、舍利以外にも、釈迦の髪の毛や托鉢、衣などの聖なる遺物も

信仰の対象であったことを記録しています。もちろん、このようなもののうち、どれだけが本当の釈迦のものであったかはわかりません。骨がそんなに長く残ることもないでしょうし、その量も限りがあります。しかし、舍利に対する信仰は根強く、中国や日本でも継承されます。ある時期の中国では、インドから大量に舍利を輸入(!)しています。日本では国家レベルでも舍利が重要性を持ち、世の中が平和な時代（天皇の治世がよい状態）には、舍利が自然に増えるという信仰があり、毎年、舍利の数を数える儀式もありました。増殖するということです。このような増殖する舍利という考え方は、今回取り上げるように、ストゥーパ信仰の基本にもつながります。また、日本でははじめから舍利そのものは求めず、水晶を舍利と見なして仏塔に安置することもあります。舍利から仏教を見ると、いろいろおもしろいことが出てきます。

「劫」の概念がとてもインド的だなあと思った。とくに大の三災で世界が減びる理由や、ふたたび世界が構築される理由が明確に示されないところがそうだと思う。ストゥーパの内部をはじめて知った。福井の足羽山にもストゥーパがある。実家のすぐ近くなので行ってみたい。ストゥーパのまわりの石に彫刻されたいろいろな海獣がおもしろいなあと思った。水のイメージがあまりに強いので、インドの地理的要因による、人々の水（＝豊かさ）のあこがれの強さの表れだろうか。今日の因果の講義は、ウパニシャッド哲学みたいだなあと思った。仏教だから違うけど。

ストゥーパのまわりに見られる水のイメージと、実際のインドの風土との関係はさまざまでしょう。授業で取り上げているパールフットやサーンチーのストゥーパは、平地や少し高台にあるので、まわりには水はあまりありませんが、モンスーン気候なので、雨期には雨はたくさん降ります。また、ストゥーパは僧院とセットで建立されたはずなので、生活用水や儀礼のための水などのために、人工的な貯水池はあったはずで、水は身近に存在したでしょう。ストゥーパは南インドのアマラヴァティーやナーガールジュナコンダでも作られまし

たが、北西インドのものとは、構造や装飾モチーフが少し異なります。また、ガンダーラでも大規模なストゥーパがあったことが、遺跡の発掘から知られていますが、独自の形態を持っていたようです。一口にインドといっても、これらの地域の風土や気候は大きく異なります。最後のコメントのウパニシャッド哲学はそのとおりで、因果関係の話や、神が動力因でもあり質料因でもあるという説明は、ウパニシャッドに起源を持つ考え方で、インドの正統的な思想でもほぼ継承されています。これに対し、仏教は神や世界の存在を否定するか、あるいは関心を寄せませんでした。仏教の授業であるのに、仏教の思想と相反するウパニシャッド的な話をしているのは、密教が仏教でありながら、哲学的にはこのような立場に近づいていったためです。この後に取り上げるマンダラも、そのような思想的な背景を抜きにしては理解できません。

仏塔（＝宇宙）に水のイメージが多いことや、多産豊穡の象徴という話だったが、水は海から生命が生まれているし、豊穡や生命のイメージなのかなと思いました。私たちが神の一部であるという話は、びっくりしました。キリストなどの神より、ずいぶん身近な神だなあと思います。

水と生命の関係は、そのとおりで、今回の授業でもあらためて取り上げたいと思います。世界をひとつの生命体と見なした場合、それが誕生するためには生命の根元である水が不可欠であるというのが、意図するところです。ついでに言えば、生物学の分野でしばしば言われる「個体発生は系統発生を繰り返す」という説、つまり、われわれが誕生し、成長するプロセスは、生物の進化を凝縮していることも、このことに結びつけようと思います。神の話が突然登場して、困惑した方も多かったかと思います。インドの思想では、世界（宇宙）の存在を問題にするときには、ある種の原理を古くから想定していました。ウパニシャッド哲学では、これは「ブラフマン」（梵）と呼ばれますが、次第にこれは単なる原理ではなく、人格的な神となっていきます。「私たちが神の一部であ

る」というのは、私の説明からそのように理解されたかもしれませんが、少し異なります。世界そのものがブラフマンであるからといって、その構成要素であるわれわれは、その「部分」であるとは説かれたいからです。むしろ、構成要素ひとつひとつが、アートマン（我）であるとか、アートマンをそなえていると考え、このようなアートマンが、究極的にはブラフマンと同じであると理解されているからです（梵我一如）。われわれと神との関係は、部分と全体ではないからです（そのような立場の学派もあります）。たしかに、一般に「神」というと、日本人はキリスト教やイエスを連想しますが、これはインドを含む世界の宗教や思想の中のきわめて特殊な例にすぎません。

**愛知県のリトルワールド、すごく好きで何回か行ったんですけど、そこでネパール版画が売られていたので、六道輪廻の版画を買いました。私の記憶では輪のまわりに十二支が描かれていて、真ん中に丸を九つに分割して、その中に文字が書かれていたような…。ネパール版画、いろいろ売っていたので、全種類ほしかったのですが、小学生だったので 1 枚だけ。密教美術からははずれますが、六道輪廻と十二支って、関係あるんですか。それ以前にネパールの十二支とはいったい？**

リトルワールドは私も以前名古屋在住のときに 2、3 回行ったことがあります。オープンしたのがたしか学部学生の頃で、オープニングのセレモニーも見に行きました。本学の人類学の鹿野先生（現在は大学理事）や鏡味先生が関係しておられます。ネパールのお寺も中に建てられていて、ネパールの山岳地帯にすんでいるチベット系のシェルバ族の寺院だったと思います（ややこしいのですが、ネパールの中にはチベット系の民族が多数住んでいて、チベット仏教を信奉しています）。私が訪れたときは、まだせつせと画家が壁に絵を描いていました。チベット語で仏の名前などを言うと、喜んでくれました。ネパール版画はチベット系のものとネパール系のものがありますが、六道輪廻図は授業のスライドで紹介したように、チベットの寺院に多く描かれています。まわりに十

二支があるものがあるかもしれませんが（チベットの暦は中国の影響下にあるので、日本と同様、十二支を使います）、一般には仏教の基本的な教えである十二支縁起を、人間や動物などを使って具象化したものが描かれています。また、中央は猪、鶏、蛇が三つどもえになっている様子がよく描かれます。これは怒り、貪り、愚かさを表し、これによって、輪廻の世界が動き続けることを表します。ネパールの首都カトマンズに行くと、このような版画が土産物屋で、1 枚、10 円以下の値段でたくさん売られています。なお、リトルワールドは経営が危ないという話も聞くので、また見に行くのならば今のうちかもしれません。

**仏教では時間と空間を合わせて考え、物理学などでやったように、時間と空間を分けて考えないとのことですが、物理でも相対論まで考慮すると、時間と空間を合わせて四次元時空を考えます。物理で四次元時空の考えが出てきたのは 20 世紀のはじめになってからだが、仏教ではそのはるか以前に時間と空間を合わせて考えていておもしろかった。**

同様のコメントがもう 1 件ありました。教養的授業は理科系の学生の方も多く出席しているので、それぞれの立場からのコメントがもらえるのはいいことです。仏教と相対性理論がどこかつながっているかもしれないというのは興味深いですが、私自身は物理に関する専門的知識がないので、その是非はわかりません。授業で言いたかったのは、われわれ現代人は、知らず知らずのうちに時間と空間を分けて思考する習慣があるが、仏教徒も含め当時のインドの人々は、このような発想はしなかったのではないかと思います。世界が周期的に変化するときに、時間的な変化と空間的な変化が不可分であることを見ると、われわれとは別のとらえ方をしていたのではないかと思います。また別の話ですが、われわれ日本人はものごとをとらえるときに、空間的にとらえたり、構造的に理解することが、どちらかといえば不得手で、むしろ、時間的な変化として把握する傾向があります。これに対し、インドの哲学や思想はその逆で、

時間よりも空間を優先的にあつかったり、上位の概念とします。人間が時間や空間を認識するのは必ずしも本能的なものではなく、多分に文化的なのです。

7章を読んで思ったのですが、結局、なぜ、デーヴィーマーハートミヤで、金剛手に当たるシュンバ、ニシュンバを倒した女神そのものではなく、その夫のシヴァが金剛手による降伏の相手に選ばれたのですか。

金剛手がシヴァを降伏させるエピソードは、『金剛頂経』という経典に説かれています（ここではシヴァではなく大自在天と呼ばれます）、その時代にはまだシヴァ神に対する信仰が、女神に対するそれよりも優位であったからだと考えています。中世インドでは女神崇拜が台頭してきて、従来から信仰されてきたシヴァやヴィシュヌをしのぐ勢力を持つようになりますが、『金剛頂経』はその過渡期に成立したと思われる。この議論には前提があって、本の中でも紹介されていますが、

『金剛頂経』の大自在天降伏神話を『デーヴィーマーハートミヤ』と結びつけて、ヒンドゥー教対仏教という図式からそれを理解するのが、半世紀以上前から日本の密教学では一般的だったのです。その根拠が、同書で女神に殺戮されるアスラの王の名前、シュンバ、ニシュンバが、金剛手の忿怒形である降三世明王の真言に登場することなのですが、実際はこのアスラの名前は、『デーヴィーマーハートミヤ』以前から知られていることが、現在では明らかになっています。その時代にも女神信仰はすでに認められますが、『デーヴィーマーハートミヤ』に登場するような絶対的な力を持つ単独の女神ではなく、母神と総称される女神の集団だったのです。教科書は一般書の体裁をとりながら、じつはこの分野の通説に対する批判や、新しい説の提示を行っていて、その背景を知っていると「なるほど」と思うところが多く含まれています（背景を知らない皆さんには迷惑かもしれませんが）。

## 10. マンダラとは何か

卵、原始の海…母胎をイメージしてしまいます。仏塔は羊水に浮かぶ胎児のようなものなのか。原始の海に漂うアメーバ、生命の始まり、現在ではもっとも有力な説として考えられる生命は海（水）からという発想は、昔から誰もが思うのでしょうか。梵（brahman）はヒンドゥー教の創造神ブラフマン、維持神ヴィシュヌ、破壊神シヴァのブラフマンと同じでしょうか。

仏塔を卵、そのまわりを海と説明したのは、まさに生命の誕生や原始の海をイメージしたものです。母胎ということばは出しましたが、それも同様です。生命は生命からのみ生み出されることを、われわれは知識としては知っていますが、これは見方を変えれば、生命は連続するものであり、過去にむかって、どこまでもさかのぼることができるということです。生命と物質の境界がどこに

あるのかはわかりませんが、生命の起源をさかのぼっていけば、最終的には宇宙の創造にまでたどり着くでしょう。先回お話しするつもりで忘れましたが、「個体発生は系統発生を繰り返す」という生物学の常識も似ています。われわれが受精卵から羊水の中で成長し、誕生する過程は、生物が水の中から陸上に、さらには乳類へと進化する過程と同じ（あるいは似ている）というものです。このようなことを、古代や中世の人々は直感的にわかっていたのかもしれませんが。われわれ現代人は生命に関する科学的な知識は豊富になりましたが、生命そのものもつ不思議さや神秘性に対する畏怖の念を失ってしまったようです。たとえば、一粒の種から巨大な樹木ができることなど、考えてみればとても不思議なことだと思いませんか？ 生命の発生や成長は、遺伝子レベルですべてプロ

グラムされているのですが、そのプログラム自体、驚くべきことです。なお、最後の文章にあるインドの神についてはそのとおりで、ウパニシャッド哲学で宇宙の根本原理を指すことばとして用いられた「ブラフマン」が、ヒンドゥー教では神の名前になります。ブラフマン、ヴィシュヌ、シヴァの機能もよく知られていますが、これはヒンドゥー教の哲学的なベルでの説明で、しかも、必ずしもすべてのヒンドゥー教の宗派に共通する理解ではありません。信仰のレベルでは、3人の神のうち、シヴァとヴィシュヌはそれぞれを最高神となります。どちらを最高神とするかでシヴァ派とヴィシュヌ派に分かれます。

**私は実際にマンダラを見たことがないので、今日一辺が4メートルもあるものがあると聞いてびっくりしました。高校の時から不思議に思っていたのですが、胎蔵界や金剛界って何ですか。**

空海が中国から持ち帰ったマンダラも、ほぼこれと同じ巨大なものです。しかも、極彩色で描かれていましたから、はじめてこれを見た日本人はさぞかしびっくりしたと思います。この空海が持ち帰ったマンダラ（請来本<しょうらいほん>といいます）は、空海の在世中にすでに色が落ちたり、切れ切れになったことが伝えられ、現存しません。ここから写したマンダラが京都の神護寺に伝えられていて、現在でも京都国立博物館に保管されています（国宝の高雄曼荼羅）。その後、請来本やこの高雄曼荼羅をもとにして描かれたマンダラが、歴史的にいくつもあります。授業で紹介した血曼荼羅もそのひとつで、請来本の正統的な流れを受け継いでいると言われています。胎蔵界や金剛界はマンダラの種類で、とくに日本仏教ではこの二つを重視しました。しかし、密教やマンダラの歴史から見れば、胎蔵界は『大日経』、金剛界は『金剛頂経』という別々の経典にもとづき、その構成原理などもかなり異なります。また、インドではこれ以外にも数多くのマンダラが現れ、この2種はむしろ、初歩的な段階に属すると考えられました。そもそも、マンダラというのはひとつで「仏の世界」をすべて表しているのですから、そ

れを二つ組み合わせるという考え方も正統的ではありません。同じマンダラであっても日本とインドやチベットとでは、扱いも位置づけもずいぶん異なるのです。なお、金剛界と胎蔵界については、教科書のコラムも参照して下さい。

**ストゥーパを上から見た図で、大日如来が東の「ほくら」におかれていたのは、東に何か意味があるのですか。**

ネパールのスヴァヤンブーナートのストゥーパのことだと思いますが、明確な理由はわかりません。インドや日本では類例がありませんし、経典などの文献にも、このようなストゥーパは記述されていません。とりあえず、私は二つの理由を考えています。ひとつは大日と阿閼の関係です。初期や中期の密教では大日如来が至上尊なので、マンダラの中尊になるのですが、後期密教（日本にはほとんど伝わっていません）になると、阿閼の方が重要な仏になり、大日と交代します。その結果、中央が阿閼、東が大日となります。ネパールの密教は中期から後期にかけてのマンダラが重視され、東には大日が来ることも阿閼が来ることもあり、いずれの仏も東と結びつきがあるのです。もう一つの理由は、儀礼に関するものです。マンダラを作ったあと、これを前にして灌頂という儀式を行います。灌頂で用いる水瓶は、それぞれの仏に対応しています。つまり、仏一人ずつにひとつの水瓶があるのですが、この水瓶をマンダラのまわりにおくときに、中尊に対応する水瓶は東の仏の水瓶の隣に置くという規定があります。これがこの場合も適用されたのではないかと考えています。

**ポロブドゥールの遺跡にとっても惹かれ、見に行きたいと思った。でも、立体マンダラのようなものと紹介されましたが、無色界、色界、欲界と説かれているあたりなど、マンダラとだいぶ配置が違う気がするのですが。それに同じところに阿弥陀如来や大日如来を何柱も置いていいのですか。**

ポロブドゥールは私がかねてから訪れたいと思っていましたが、2年ほど前によく行くことができました。期待通りの巨大で壮麗な建築物でし

た。階段を昇り、一層ずつ見て回りましたが、途中で根負けするほど、たくさんの浮彫や装飾があります。ポロブドゥールが立体マンダラというのは、日本で好まれる説明ですが、ご指摘のとおり、密教のマンダラとはかなり異なります。三界をそのまま階層化していることから、仏教の宇宙観に関係するのはたしかですが、むしろ、マンダラも仏の世界＝宇宙を表すということで両者を結びつけ、宇宙という共通点から、立体マンダラという説明が与えられたのでしょう。もちろん、インドネシアの仏教文献に立体マンダラという記述があるわけではありません。阿弥陀や大日が複数置かれている理由もよくわかっていませんが、配置にあたってはそれぞれの方角が意識されているようです。ポロブドゥールはインドネシアの古都ジョグジャカルタの郊外にあります。やはりこの町の近くにあるブランパン地区のロロ・ジョングランというヒンドゥー教寺院も見応えがあります。

マンダラは「仏の世界の縮図であり、悟りの境地を表している」というのは違うとおっしゃっていましたが、私は今までそのように思っていました。今まで思っていたことが全然違ってたと知り、少しショックでしたが、間違っているとわかり、よかったです。

間違いとは言っていません。「仏の世界」にしる、「悟りの境地」にしる、マンダラの説明としては正しいのですが、いずれも実際に見たことのないわれわれは、マンダラとはそういうものであるということを確認する方法を持たないということです。先回も強調したように、われわれが見ることができないものを「どのように表現しているのか」ということの方が、むしろ「マンダラとは何であるか」という問いへの答えになるのです。学問とはこのような根本的な問いを発することからはじまります。偉い先生の書いた本にある「マンダラは仏の世界云々」という説明をそのまま受け売りにしても、何も新しいことは発見されません。

日本の曼荼羅はほとんどが四角で囲まれている感じがするけど、インドやチベットのものは、円の

中に囲まれた四角で、仏たちを並べただけのものより、装飾性があると思う。

日本の曼荼羅が四角で、インドやチベットのものの方が円に内接する四角というのはそのとおりです。これらは、四角い部分が共通で、仏たちの住む楼阁を表しています。インドやチベットのマンダラで、これを囲む円の部分は、宇宙全体の蓮（華嚴経の世界観を思い出して下さい）や、結界の役割を果たす金剛杵、火炎を表します。これらは本来、マンダラの一部とは考えられていなかったようですが、インドやチベットではマンダラを描くときに必ず加えなければならないものになりました。

日本の五重塔などの塔は、飛鳥寺式、四天王寺式、法隆寺式の順に見られるように、年代を経るにしたがって、寺院の中心から外へはずれて建てられるようになった。この配置の変化には、何か意味があるのだろうか。いろいろなマンダラがあるが、その作者が何を理解して描いていたのか、興味がある。今でも新たな構造のマンダラは作例されているのだろうか。マンダラを平面図にのみ示すのではなく、立体的に示せば、もっとわかりやすくなると思う。

日本の伽藍配置は専門的に詳しい研究がありますので、ここでは立ち入りませんが、一般に仏教寺院がいかなるもので構成されているかを紹介しておきます。インドでは本来、仏教寺院に相当するものは、出家した僧侶が集団生活を送る僧院が基本です。しかし、それと平行して、釈迦の遺骨をまつる仏塔があり、しばしば、両者は隣接して建てられます。僧の生活空間と、仏塔という礼拝空間が存在したわけです。マンダラがもつような宇宙論的な構造は、このうち、礼拝空間と共通しますが、それはヒンドゥー教の寺院などでも同様で、寺院は「神の家」とみなされます。日本の寺院も同様に生活空間と礼拝空間をそなえています。儀式や法会を執り行う金堂や講堂なども加わり、さらに複雑化します。ひとつの建物の中に、礼拝空間と儀礼の空間が組み合わされた仏道などと呼ばれる建造物が、寺院の中心になる場合も多いです。大規模な寺院の場合、山門、鐘楼、食堂（じ

きどう)など、さらにさまざまな建造物も加わり、複合施設の様相を示します。一口に寺院といっても、その中には多様な要素があるのです。マンダラについては、インドの密教の歴史の中に現れた数多くの経典が、それぞれ独自のマンダラをししばしば説いています。経典といっても、おそらく何らかの作者がいるはずですが、その意図やマンダラの理解は、経典の中の記述からいろいろ想定できます。密教の経典というのは歴史的な産物ですから、現在では新しいマンダラが生み出されることは、少なくとも密教という枠組みの中ではあり得ません(芸術家がマンダラ的な絵を描くというのは別です)。マンダラが本来立体的な構造を持っているのは、これからの授業でも説明することで、もちろん正しいのですが、だからといって、立体的に表した方がわかりやすいとは言えません。むしろ、設計図のようなものとみなせば、立体的な模型よりも、このような図の方がわかりやすいのです。マンダラは一種の「家」ですが、われわれが家の構造を知る場合も、設計図や間取り図をおもに見ます。立体的な模型を作ることもありますが、壁や屋根にさえぎられて、中が見えず、かえってわかりにくいこととなります。それならば、屋根や壁を取り外せばいいと思いますが、実はそのような発想で描かれているのがマンダラなのです(これについても今回説明します)。

高野山には数度行ったことがあり、オレンジ色の建物を見たことがあるが、当時は何の知識もなかったもので、ただの建物だったが、授業の中のスライドで見ると、それなりにすごいものに見えた。同じものを見るのでも、そのときの状況によって、これほど違うものかと、少し不思議に思った。ぜひ、あらためて高野山にも行ってみたい(世界遺産にも登録されました)。同じものなのに、知識が増えることで、まったく別のものに見えるというのは、この授業のもっとも重要な「ねらい」のようなものなので、実際にそのように感じてくれるのはうれしいです。授業では同じスライドをたびたび見るがありますが、これは手抜きではなく、同じものであっても、あとになれ

ばなるほど、理解が深まったことを実感できるからです。絵や彫刻のようなイメージを理解するということは、単に目に見えるということではないと、実際に体験していただきたいと思います。

日本の曼荼羅は全体的に赤いものが多いのに、チベットなどのマンダラはカラフルだと思いました。あと曼荼羅はどれも全体的に円を描いていますが、描くときになにかきまりのようなものがあったんですか。

マンダラの描き方については今回、少し詳しく紹介しますが、それも含めて私の著書『マンダラの密教儀礼』が参考になります。マンダラを描くのは描く人の気分や美意識によるのではなく、経典や儀軌(ぎき、説明書のこと)、注釈書などに、その方法がきわめて厳密に規定されています。マンダラの輪郭線は糸を使って直線や円を描くので、「墨打ち」とも呼ばれます。マンダラというのはいずれも「きまり」にしたがって描かれ、そこには描く人の創造性などはまったく必要とされないのです。マンダラが単なる絵画ではなく、一種の設計図であることは、このような点からもわかります。

たまーに宇宙には限界があるのかなあとか、あるとしたら、その外はどうなっているんだろうとか考えます。今日のバクテリアの話聞いて、ますます不思議な感覚に陥ってしまいました。バクテリアにとっては、人体の外はまったく未知だし、それは私の疑問と同じことなのかと思うと、私たちが生活しているこの世界は、いったい何だろう…。回ってきたマンダラの冊子、ため息が出るばかりでした。すっごく細かく描いてあって見事の一言です。ちびまる子ちゃんの表紙とかは、マンダラを意識してるのかなあ。

宇宙(世界)や自己というのは、哲学の根本的な問題のひとつで、古今東西の哲学者がさまざまな考察をしています。このような問題は、おそらく誰もが一度は疑問に思うことですが、たいていはそのまま日常的な思考に戻ってしまいます。この機会にぜひ、いろいろ本などを読んで考えてみ

て下さい。マンダラの本は授業でも紹介したように、展覧会の図録ですが、内容は充実しています。この展覧会は大阪の国立民族学博物館（民博）で行われ、先日まで、名古屋市立博物館でも開催されていました。民博ではこのような企画展が年に1、2回行われ、そのたびに図録が刊行されるのですが、このマンダラ展の図録は、過去にないほど、良い売れ行きだったそうです。あまり厚くなく、値段も手頃で、写真もきれいなところがよかったです。

ようです。「マンダラっていったい何だろう」と疑問に思い、それが何であるかを知りたいと思う人が、世の中にはたくさんいるということかもしれません。ちびまる子ちゃんの本はよくわかりませんが、マンダラにインスピレーションを得て絵を描く人はたくさんいます。インドのエスニックなデザインも、本の装丁を含めいろいろ目にします。

## 11. マンダラと儀礼

絵を描くということに正解はないんだなということ、改めて実感しました。多視点の複合に対して、あまりよい印象を持っていなかったのも、子どもがそんな絵を描いていたら、一視点で描くように指導してしまいそうな私でした。でもよく考えれば、いろんな視点を考えているからすごいんですね。砂マンダラって、のりなどで固定するのですか。「ふうっ」てしたくなりますね。

子どもというのは、たいいてい絵を描くことが大好きで、紙とクレヨンなどを与えると、かなり小さな子でも、楽しそうに自由自在に描きます。そのような絵に、ときどき、はっとするような斬新なものがあり、驚かされます。授業では子どもの絵しか取り上げませんでしたが、子ども向けの絵本にも同じようなことがあります。子どもたちが好む絵は、けっして「写実的な」絵ではありません。子どもに人気のある絵本の絵には、ときどきわれわれ大人には理解できないようなものもあります。子どもは柔軟なんですね。むしろ、大人の視点で正確に描いた絵などは、好まれないことが多いようです（図鑑などの場合は別です）。砂マンダラは初めて見た方が多いと思いますが、チベット仏教で現在でも作られています。また、一般にはチベットの特殊なマンダラと思われていますが、実際はこれと同じものがインドでも作られていました。ただし、13世紀頃に仏教が衰退した後は、その伝統は残っていません。砂マンダラが何のため

に作られるのかは、今回お話ししますが、用が済めば、最後はたいいてい壊してしまいます。それがきまりであり、壊すことも儀礼の一部となっています。日本や欧米でチベットの仏教美術展などが開催されると、チベットからお坊さんと呼んで、砂マンダラ制作をよく行いますが、そのようなときは壊すのが惜しいので、後から樹脂のようなもので固め、保存することがあります。しかし、完成した直後はとてもきれいですが、時間がたつと、表面にほこりがたまったりして、みすばらしくなります。やはり、こういうものはきまり通りに、壊した方がいいようです。

**チベットのマンダラは、中の四角？の色が、右回りに赤、緑、白、黄色となっていたようですが、きまった配色なのでしょう。**

マンダラは対角線で四つの区画に分かれ、そこが質問にある通りの色で塗り分けられます（したがって、区画は四角ではなく三角になります）。これらの色は、四方の仏の体の色に対応します。東（壁画の場合は下に来る）は大日の白、南は宝生の黄色、西は阿弥陀の赤、北は不空成就の緑です。さらに中央は阿閼の青となります。マンダラを中心となるこれらの五仏は、すべてのマンダラに現れるわけではありませんが、他の仏が登場するマンダラも、それらの仏を五仏と「同体関係」と解釈して、対応する仏の色が塗られます。またこれ

とは別の説ですが、マンダラの楼閣は須弥山の頂上にあるので、須弥山の四方の壁面の色がこれらの4色であるともいわれます。須弥山はその周囲がそれぞれ異なる宝石でできているためです。

写真とかで見かけるマンダラは全体的にうす茶色でぼんやりしてるけど、「聖者流秘密集会マンダラ」は色鮮やかできれいでした。マンダラって色あせたものばかり見てきたから、そういうものだと思ってたけど、そういえば、描かれた当初はきれいだったんだなあと今さら気づきました。砂マンダラにとってもころ惹かれました。実物を一度みたいですよ。

たしかに、日本に残る文化財的なマンダラは、たいてい、長い年月の間に褪色したり、破損したりして、古い絵という印象を受けることが多いようです。しかし、授業で時々紹介する「西院本両界曼荼羅」（さいいんぼんりょうがいまんだら）などは、いまでも制作当初の色がよく残っていて、とても鮮やかです。それだけ大事に伝えられたということでもあります。また、空海が唐から請来したマンダラにもとづいて描かれた「高雄曼荼羅」（たかおまんだら）は、紫綾金銀泥で描かれました。これは、濃い紫色の布に、金や銀の絵の具で描いたものです。高雄曼荼羅は現存しますが、現在ではほとんど線は見えません。しかし、制作され、堂の中にかげられたときは、ろうそくの光などに照らされて、仏たちが闇の中に浮かび上がり、きらきらとゆらめくような効果があったと言われます。同じような紫綾金銀泥のマンダラとして、奈良の子島寺に伝わる子島曼荼羅があります。これは現在でもかなりよく線が残っています。

以前、新聞でピカソは偏頭痛を持っていたので、本当にああいう風に見えていたのだという学説が発表されたという記事を読みました。偏頭痛がひどい人の絵は、ピカソに似ているのだそうです。

そういう学説は知りませんでした。すこし「まゆつば」ではないかと思えます。ピカソは子どもの頃からとても絵がうまく、美術の教師であった父親が、それを見て自信を失い、絵を描かなくな

ったという逸話が残されています。また、授業で紹介したようなキュビズムなどの作風で描く前の「青の時代」などでは、いわゆる写実的な絵を描いています。偏頭痛の持病を持つ人が、ひどい頭痛のときに、目を開けていられなくなり、目をつぶっても光が稲妻のように走るのが見えることがあります。そのような直線的な光と、ピカソの絵の表現方法に似ているところがあるかもしれませんが、それを絵の中に表現したということは、おそらくないでしょう。なお、ピカソは古典的な絵画の習作も多く残っていて、そこでは、ルネッサンスや印象派の絵画が、ピカソ風にアレンジされていて、彼がどのような表現を好んだかがよくわかります（高階秀爾『ピカソ 剽窃の論理』がくわしい）。

平安絵画のマンダラだけでなく、立体マンダラや砂マンダラといった形態もあることを知り、驚きました。これらのマンダラはどのくらいの高さなのですか。平安絵画のように、一辺が4メートルもあつたりするのでしょうか。

立体マンダラは一辺が1メートル程度のものが多いようです。しかし、中にはお堂いっぱいにつくられ、一辺が4、5メートルの高さを持つ巨大なものもあります。私も以前、中国の青海省で見たことがあります。チベットで作られる砂マンダラは、2メートル程度のものをよく見ます。あまり大きすぎると、作るのがたいへんですし、小さすぎると、肝心の儀式で使うときに不便です。マンダラにきまった高さが無いのは、作る人の体を基準にするからです。多くの場合、制作者の肘から手の先までの長さが基準になります。これは、インドの建築術に由来します。家をたてる場合、絶対的な高さではなく、棟梁の体の大きさに基づくからです。このようなどころからも、マンダラが家であることがわかります。

マンダラができあがるには、あのような儀礼を経たということを知った。スライドでダライラマがマンダラを作る様子の写真がありました。ダライラマって、今まで一人の人物の名前だ

と思っていたんですが、14世と書いてあったので何人もいますね。

数年前にノーベル平和賞を受賞したので、ダライラマの名を知っている人もたくさんいると思います。「チベットの精神的指導者」とよく説明されますが、1950年代にチベットが中国に制圧される前は、チベットの最高権力者つまり為政者でした。ダライラマというのは固有名詞とされていますが、一種の称号で、チベット仏教の高僧に与えられたものです。チベットには「活仏制度」というものがあります。これは、大乘仏教の菩薩思想を根拠にして、われわれ衆生を救済するために、菩薩が人の姿をとって、法を説いてくれる。しかも、死んだ後も、また別の人に生まれ変わって、衆生救済につとめてくれるというものです。したがって、現在のダライラマ14世も、その前のダライラマ13世の生まれ変わり信じられていますし、将来、15世、16世と続いて行くはずで、チベットにはこのような高僧の生まれ変わりがたくさんいて、最大勢力のゲルク派の中で、もっとも権力があつたのがダライラマなのです。ナンバー2にはパンチェンラマがいます。歴史的に見ると、このような活仏制度は、恣意的な後継者選びとなるため、しばしば、政治の道具に使われ、さまざまな不幸を生みました。また、最近ではチベット以外の欧米からも、活仏の転生者が見つかったりしています（たいてい、熱心のチベット仏教の信者の家族からです）。

血曼荼羅なんてなんて生々しい名前なんだろうと思った。今までいろいろな仏像を見てきたが、それらの仏像と曼荼羅に描いてある仏の姿と、何か関係があるのだろうか。チベットの曼荼羅は円の中に四角い枠がある構造になっているので、なんだかストゥーバの内部を解体してきているような感じがする。ストゥーバの装飾には、水に関するものが多かったが、いわゆる宇宙、全世界、全生物の源である水とつながりがあるのかなあと思った。曼荼羅を立体化したものを見たが、平面図のと比べて、神秘性が失われていき、宇宙との関連性もあまり感じられなくなった。

血曼荼羅は正式名称ではなく、一種の通称です。日本に伝わる曼荼羅は胎藏界曼荼羅とか金剛界曼荼羅とかが正式の名称になるのですが（たとえば文化財として登録するときの名称）、そうすると、高雄曼荼羅も子島曼荼羅も西院本も、どれも区別が付かないので、このような通称で呼ばれることが多いのです。マンダラに登場する仏も、これまで取り上げてきた密教の仏たちですが、その種類や表現方法を知るために、パンテオンの構造や表現の画一化などを見てきました。具体的な話は今回する予定です。マンダラが形態的にストゥーバに似ていることも、授業で意図していることです。マンダラには水のシンボルは希薄ですが、トーラナのマカラなどに、少し残されています。ストゥーバと宇宙の関係を取り上げたのも、マンダラが宇宙をあらわしていることの伏線となります。「マンダラとは宇宙の縮図である」と突然言われても、おそらく何のことであるか、わからなかったと思います。宇宙を介在させることで、マンダラとストゥーバは結びつくのです。

砂マンダラが非常に美しかった。けれど、頭では理解できたが、やっぱり、ぱっと見では秩序だった世界図とは理解しがたいかもしれない。あと、マンダラ制作で土地を決めるとなっていたんだけど、どのような場所が適していて、どのようなところは適していないのですか。

もちろん、マンダラを見ただけで、これが「秩序だった世界図」であるとわかる人などいません。だから私も「見ただけでわかってもらっては困る」と新聞にも書いたのです。マンダラの説明としてよく用いられる「仏の世界」という言葉からは、普通の日本人はおそらく浄土図のようなものを想像するでしょう。これは、阿弥陀の仏国土である極楽浄土を描いたもので、文字通り「仏の世界」です。浄土図は一種の情景図であるので、簡単な説明を聞けば、何が描いてあるかはだいたいわかります。しかし、マンダラの方の「仏の世界図」は、見ただけではもちろん、何を意味しているかわかりませんし、わかるためにはこれまでの授業で延々と説明してきたことや、実際にマンダ

ラを用いた儀礼について知る必要があります。マンダラは情景図ではなく一種の設計図なので、その描き方の法則を知らないものには、わかるわけがないのです。マンダラのための土地の適不適は、文献ごとで少しずつ異なりますが、方角、まわりに生えている樹木の種類、川の有無、土地の傾き

方などがチェックされます。さらに、その土地が本当に適しているかどうかを、いくつかの方法で確かめます。これらはいずれも、建物を建てるための条件として、建築学の文献などにも見られるものです。

## 12. マンダラと儀礼（続き）

マンダラは儀礼のために作られたということで、日本ではそれにあたるのが敷曼荼羅だということだったけど、日本の他の曼荼羅は何のために作られたのでしょうか。

すべての曼荼羅が儀礼のために作られたわけではありません。たとえば、日本には神道曼荼羅や社寺参詣曼陀羅（立山曼荼羅や那智参詣曼荼羅が有名）などがありますが、これらはあまり儀礼とは関係なく、寺院や社寺の縁起を描いたり、それを信者にむかって絵解きするために用いられました。しかし、本来、真言宗や天台宗などの日本密教で用いられた曼荼羅は、儀礼という要素を抜きにしては、まったく理解できないものです。とくに、一般の人々の曼荼羅理解は「きれいな仏の群像」という程度のもので、これでは浄土図や涅槃図などの仏画と、何らかわりません。密教寺院で見る曼荼羅は、たとえばお堂の左右に掛けられていますが、これはその前で僧侶が儀礼を行い、精神集中をするための装置にもなります。また、別尊曼荼羅（べっそんまんだら）と呼ばれる特殊なマンダラが、数多くありますが、これはマンダラに描かれている仏の力を借りて、特定の祈禱を行うものです。従来、仏教美術の研究は、芸術品や美術品として、その美しさや表現方法にのみ関心が向けられていましたが、最近では機能、つまり美術作品が何のために用いられたかということに対する研究がさかんになってきました。ちなみに、上にあげた浄土図や涅槃図のような情景図的な絵画であっても、それぞれ特定の儀礼に結びついています。マンダラを理解するためにもその機能を知

る必要がありますが、その場合、灌頂という儀礼がきわめて重要な位置を占めているわけです。

マンダラの儀礼の後、弟子は仏と同等の位を得るのですか。それとも、まだ仏の中の階層を昇らなければならないのですか。

仏の一步手前といったところですよ。授業でも紹介した「菩薩の十地思想」では、最終段階の第十地に相当します。大乘仏教では無数の仏が登場するようになることは、以前の講義でお話ししましたが、これらの仏は、空間的には同時に無数存在するのですが（三千大千世界に一人ずついるので）、時間的には同じ世界には一人しかいません。弟子が仏になることを保証されるのは、つぎに現れる仏が弟子であるというお墨付きをもらうわけです。灌頂が国王即位儀礼ではなく、立太子の儀礼に相当するといったのはこのためです。国王に王子がたくさんいても、つぎの国王は一人だけです。その一人を決めるのが立太子の儀礼です。仏教に置き換えると、菩薩たちが多くの王子で、その中で次期後継者となることが決定されるのです。大乘仏教では弟子も含め、悟りを求めて努力する者たちは「誰でも菩薩」であり、そのときのモデルとなるのが、悟りを開くまでの釈迦なのです。釈迦が王族の生まれで、そのまま世俗にとどまれば国王となることも、仏教にとっては常識でした。

投華得仏の様子を昔、空海を主人公にした映画で見たことがありました。その映画では蓮の花を落としていたような…。空海が落とした花が、ちよ

うど真ん中に落ちていました。

投華得仏は灌頂儀礼の中でドラマティックな場面なので、よく映画やドラマでも出てくるようです。ただし、灌頂儀礼全体から見れば、これは準備的な段階にすぎません。灌頂にはプロの密教僧となる伝法灌頂や阿闍梨灌頂と呼ばれるものもありますが、その一方で、在家の信者が受けることができる結縁（けちえん）灌頂というものもあります。いずれもインド以来の伝統を持っています。投華得仏はプロのための灌頂だけではなく、結縁灌頂でも行われ、文字どおり「仏さまとご縁を結ぶ」と説明されています。投華得仏の説明は、授業では簡単に済ませてしまいましたが、マンダラに描かれている仏の世界に、灌頂を受けるものがはじめて接する段階です。これはルーレットのようなもので、投げた花が落ちたところの仏が守り本尊となります。場合によっては、曼荼羅の外に落ちることもあり、三回までならやり直せますが、それを越えると資格無しとみなされます。マンダラの中には仏が描かれていないところもあり、そこに落ちた場合は、そこから一番近いところにいる仏が、選ばれます。空海は長安で金剛界と胎藏界の二種類の灌頂を受けていますが、そのいずれにおいても中心の大日如来の上に花が落ちたと伝えられ、師の恵果阿闍梨が感心したと言われています。現在の真言宗では、これにならい、マンダラのどこに落ちてでも中心に落ちたことにしてしまうそうです。司馬遼太郎は『空海の風景』の中で、これを「姑息な変更」と言っていますが、マンダラの仏たちはすべて中心の大日如来から生み出されたものなので（大日如来は宇宙の根源的な仏です）、べつにそれでもかまわないのですが、たしかに儀礼本来の意味は失われています。なお、投華得仏で用いられる花は、インドの文献ではとくに指定はないようですが、日本では「しきみ」という木の葉を使います。

**仏教が異教の神を取り込んでいったのは、密教成立時と重なるのでしょうか。これは仏教教団が拡大をねらった戦略と考えてよいのでしょうか。**  
 仏教の仏と異教の神については、今回くわしく見

ていきますが、仏教が異教、とくにヒンドゥー教の神を取り込んでいったのは、特定の時期だけではなく、つねに行われたと考えています。「取り込んだ」というよりも、ヒンドゥー教の神々の中で、それを参考にしつつ、オリジナルな仏のイメージを何とか作り出そうとしていたようにも見えます。時代による違いがあるとすれば、むしろ取り込み方で、初期にはインドの神々のイメージとしては、穏当な方法で仏教の仏が作り出されていたところが、中期から後期にかけては、その方法から逸脱するような特殊な取り込み方をしたように感じられます。「別の神を足の下に踏む」というパターンで、このことも今回とりあげる予定です。

**儀礼の後に、せっかく描いたマンダラをこわしてしまうと知って、とても驚きました。仏がおりにきているのをこわしてしまったら、どうなるのかと思ったからです。仏に帰ってもらおうという特別な儀式などはなくこわしてしまうのですか。**

ご質問のとおりで、儀礼の最後の段階で、マンダラに宿っている仏たちに、本来の場所に帰ってもらおうプロセスがあります。マンダラとはあくまでも「仮の宿」であって、儀礼の時間の間だけ、そのような意味を持つのです。このような発想は、インドでは一般に広く見られ、古代のヴェーダの祭式でも、儀礼が終われば、儀礼のための装置は壊されるか、そのまま放置されます。また、神々を儀礼の場に招き、供物を捧げたり、礼拝した後、お帰りいただく方法も、ヒンドゥー教の寺院などで広く行われています。マンダラとは儀礼に参加するもの、とくに弟子にとってのみ重要であり、しかも「秘密にすべきもの」という意識がつよいものです。仏が降りてくるための「よりしろ」になるようなものが、日常生活の場に存在する方が、危険なのです。儀礼の空間というのは、儀礼という非日常的な時間においてのみ成立するからこそ、意味があるのです。

**曼荼羅には多くの仏が描かれているが、その中央の仏が自分であるならば、まわりの仏たちは、仏**

になった自分の友達や師匠を表すのだろうか。灌頂はどのくらいの頻度でなされているのだろうか。またその儀礼はすべての弟子が受けるものなのだろうか。昨日、日本の美術を調べていたら、涅槃図に出てくる人物や動物を大根や人参などの野菜に変えて描いていたり、歌舞伎の俳優たちに変えたりして、おもしろいなあと思った。曼荼羅にもそういうのはないのだろうか。

すでに、上の方でも書きましたが、マンダラの中心の仏になるというのは、宇宙の根源的な仏（日本では大日如来）になるということです。密教的な世界観では、宇宙とはこのような根源的な仏が現れたものにすぎませんから、自分自身が宇宙そのものと同一になるということになります。したがって、まわりの仏たちも自分が姿を変えたものにすぎません。しかし、その一方で、仏教の宇宙観では、特定の仏国土に特定の仏がいることになっているので、このような約束ごと、マンダラに仏を描く場合、重要になります。また、仏教のパンテオンが仏、菩薩、明王、女尊、天のような階層に分かれているのも、マンダラのもつ同心円的な構造（中心を持ち、周縁にいくほど、レベルが下がる）に結びつけられます。灌頂の頻度にはきまりはありません。弟子が所定の修行を終え、灌頂を受けることを望めば行います。しかし、現在の日本の真言宗や天台宗では、定期的に行っているようすし、灌頂の種類によって、その頻度も異なります。

涅槃図を野菜や歌舞伎役者に置き換えたものは、江戸時代の浮世絵の中に見られ、他にも禅画や古典的な絵巻物が素材になっています。浮世絵に見られるこのような手法は「見立て（みたて）」と呼ばれ、文学作品や芸術に対する広範な知識を必要とします。江戸時代の洗練された文化のひとつの現れで、たんなるパロディーではありません。しかし、マンダラがこのような見立ての素材になることはおそらくなかったと思います。見立ての場合、オリジナルの意味、とくにその物語的な要素が分かっていることが重要になるので、そのような要素をもたず、一般の人には意味不明な曼荼羅では見立てにならないのです。

灌頂でも水がすごく大切な役割を果たしていますが、それはやっぱりインドでも水は生命の源などのように、大切なものとして認識されていたのでしょうか。

灌頂ということばそのものは「上から水を注ぐ」という意味ですが、インドでは国王の即位儀礼の名称として、古くから用いられています。その場合、インドのまわりにある 4 つの大海の水を新しい王に注ぎ、その支配権が付与されたことを表すと言われます。このような説明もわかりやすいのですが、それならば水ではなく、もっと別のものを用いてもよいはずですが、対象を刷新する力や、新しい生命を与える力を水が持っているからこそ、儀礼の象徴的な道具として用いられたのでしょう。儀礼とは特定の行為や道具、ことばなどから構成されますが、このような象徴的な意味がしばしば込められています。その意味は、必ずしも儀礼を行うものにとって自明のことではなく、より広い文化的な視野をそなえた観察者にのみわかるようなものもあります。その一方で、儀礼から必要以上に象徴的な意味を読み解こうとすると、恣意的な解釈が起こることもあります。儀礼の研究はおもしろいのですが、なかなか難しいものです。

**五智灌頂では五つも智慧がいただけるのですね。五つからひとつ選択するののかと思いました。パランスよくってことですか。**

五智とはマンダラの中心にいる大日如来と、その四方の四人の仏、すなわち五仏がひとつずつ持っていることになっています。言いかえれば、仏の持つ五つの智慧が神格化されて顕現したのがこの五仏ということになります。そのため、五仏は五智如来とも呼ばれます。インドでも日本でも、灌頂のひとつの中心が、この五智を弟子に授けるプロセスです。授業でも言ったように、仏になるというのは、仏の智慧を獲得することですから、当然重要ですし、五つそろってはじめて完全になります。五智のそれぞれの名称は教科書の 71 頁にもあげましたが、法界体性智、大円鏡智、平等性智、妙観察智、成所作智です。漢字ばかりでむずかしそうです。

北野天神縁起で、六道の話があって、そこの「修羅」に象に乗った帝釈天が出てきたのですが、戦いに関係しているのですか。神の中の王なのに。

六道を描いた絵の中に登場する帝釈天は、戦いのシーンに含まれることが一般的です。六道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という輪廻で生まれ変わる6つの世界で、そのそれぞれの世界を描いたのが六道絵です。インドやチベットでは六道輪廻図と言って、車輪のような円を分割して、各区画にひとつずつ描きますが、日本では絵巻物や屏風絵のような形で、並列的に描かれるのが一般的です。六道の中の天の部分は、天人や天女が楽しく過ごしている場面や、寿命が尽きて衰えていく様子（有名な天人五衰）が描かれますが、その

ほかに修羅と組み合わせて描かれます。つまり、戦争に明け暮れる修羅の世界を描くために、その相手である天が必要で、天の軍勢の指揮を執っているのが、象に乗った帝釈天なのです（教科書でよくとりあげたアスラ＝阿修羅とデーヴァ＝天の戦いです）。六道絵は日本では単独で描かれる他、地獄絵や参詣曼荼羅、観心十界図などに組み込まれます。北野天神縁起絵巻もそのようなもののひとつで、日蔵という僧侶が六道をめぐる場面が描かれ、そこに修羅と天との戦闘場面も登場するのです。なお、北野天神縁起絵巻にはいくつかの系統があるのですが、この主題が現れるのは、承久本と呼ばれる系統のものです。

### 13. 仏教の仏と異形の神

前回は講義の最終回なので、授業全体への感想も多く見られました。質問への回答は最小限にして、できるだけ多く紹介したいと思います。類似の内容のものは代表的なものにまとめました。

神様すごろくはわかりにくいようで、わかりやすい。因果関係はちゃんとあるんだと思った。

密教美術の世界では、たくさんのがマンダラに行き着くことがわかり、密教美術の世界でのマンダラ的重要性がわかった。

神様同士、いろんなつながりがあるんだなと思った。ややこしいなあー。イノシシが神聖な動物だとはじめて知った。

神や仏のあいだでもその順位の入替わりや、殺し合いをするということがあり、どこか人間性も含まれていると思った。必ずしも高貴なイメージだけではないということを実感した。

神々が人間くさいのはギリシャ神話などでも同様で、むしろキリスト教やイスラム教の神の方が特

殊な神です。神話とは人間の世界を反映し、先鋭化した物語なのです。

理解がしにくいところも多々あったけれど、その理解できなさがおもしろいと思いました。宇宙や世界を形あるものに表すという手法がおもしろかったです。

ガネーシャの絵がとてかわいらしかった。マヒシャースラマルディニーの乗り物がライオンだったが、古代インドにライオンはいたのだろうか。梵天の乗り物は何匹かのアヒルだが、移動するときたいへんそうだなあと思った。「足の下神様」とは珍しい概念だと思ったが、下のものは神々の味方であり、上のものを支えるという意味だとわかると少し納得がいく。しかし、上下の支配関係の方がやはり自然な感じがする。曼荼羅に星座が描かれているなんて驚いた。星座は西洋のものだと思っていたので、ヒンドゥー教の神々にあるとは本当に意外だった。

ライオンは早くからインドに伝わっています。有名なアショーカ王柱には聖獣のひとつとしてライ

オンが表されていますが、とてもリアルです。おそらく西アジアやアフリカの方から本物のライオンがもたらされたのでしょう。インドでは古くから王のイメージとしてライオンは好まれ、仏典でも釈迦の偉大さをたたえるために、しばしば用いられます。星座のあたりは猛スピードでとばしたところで、十分説明できず残念でした。天文学や占星術はインドで古くから発達していました。われわれのよく知っている十二宮の占星術（牡羊座とか水瓶座とかの）は、アラビア起源で、インドもヨーロッパも共通です。日本にも仏典を通じて伝わっています（発達はしませんでした）。マンダラにはこのような天文の神々（星宿神といえます）も描かれています。

今まで仏像やマンダラや仏塔やいろいろ見てきたけど、最後で何となくひとつにまとまったように思いました（なんとなくですけど）。

たくさん神がいるんだなと思った。カラフルな絵もあって、それは最近描かれたものらしく、絵の描き方とかも変わってきているのかなと思った。

教科書を読んでまとめていたことが、授業の内容だったのでわかりやすかったです。マンダラの外側の方まで注意してみたことがなく、とても興味深いと思いました。とくに仏の世界だとばかり思っていたのが、意外にも奇妙な星座などだったので…。

蛇や水や少年神と孔雀には密接な関係があると先生はおっしゃいましたが、関係を持たせることで何かを表現しているということはあるのですか。あとムルガンはやさしそうで、私の中での神のイメージに似ているなと思いました。絵もきれいでしたし。

意図的に何かを表すというのではなく、同じイメージを異なる宗教の神々が共有しているところに、われわれが意味を読みとるということです。また、共通のイメージをたどることで、宗教の垣根をこえた基層文化のようなものを見いだすこともでき

ます。それは、場合によっては、インドとか日本という国や文化をこえて、人類に共通するイメージであるかもしれません。

教科書を読んでわかっていただけですが、ヒンドゥー教の神からイメージを借りてきたと聞いて少し複雑な気分になった。

今まで講義を聞いてきて、十分に内容を理解することはむずかしかったが、はじめは仏は2, 3種類しかないものだと思っていたので、今回の一連の講義で、仏の世界について多少の知識を得られたことは、たいへん意義のあることだったと思う。

仏教の仏とヒンドゥー教の神々は敵対せず、むしろ仏教の仏はヒンドゥー教の神々に支えられていると聞いて驚いた。異なる宗教なのに接点があるのは、何だか不思議な気分だ。

何でこれだけ多くの仏たちが生み出されたかということが、少しでもわかったような気がする。スライドもきれいだった。どうもありがとうございました。

今までの授業の内容が、最近やっとながりました。一番最後の「まとめのまとめ」の話がたいへん興味深くおもしろかったです。

下敷きにしている神と親密な仲というのはわかったけれども、踏みつけている作品にはどうも納得いかなかった。

各宗教の神々が密接に関係しているのを見ると、やはり宗教は人々の手によって少しずつ変えられていっているんだなと実感できた。

ガネーシャが童子神と聞いて、たしかにあの愛嬌といい、象の姿といい、子どもらしさが出ているなと思った。

パールヴァティーとマヒシャースラマルディニー

(優しさと恐ろしさ)を同一視するところに、女の人の本当の怖さを表現知っているような感じでおもしろかったです。教科書でもありましたが、上のものが下のものを支配するというわけではないというのは、日本にはあまりない発想のような気がして新鮮でした。

シヴァの妻(怖い方)であるマヒシャースラマルディニーは、見た目はすごく美人で優しそうなお顔をしていますので、水牛の魔神を殺しているなんて信じられません…。人(仏?)は見かけに olmayanのかなぁと思いました。なかなか楽しい授業でしたよー!! 試験がやはり心配です…。

今後、イメージに接する機会があれば、今日、先生が授業の最後に話してくださった反復を試みるようにしたいです。

仏教の神とヒンドゥー教の神が共存し、敵対していないということが意外だった。この授業は今まで知らなかった世界が開けて、楽しかったです。

破壊、創造、維持の三つの担当の三人がいる。という話はこんな昔からあったのかと感じた。いろいろなところで見聞きするが、原点にあえた気がした。

たしかにはじめてこの授業でスライドを見たときとはいろいろ違ってきているように思う。仏教(仏像)とかの美術には、もともとそんなに興味を持っていなかったけれど、とても楽しい授業でした。

知らない世界が知れておもしろい授業でした。

神々の下敷きになっている人、動物たちは、上のものを支えるためにいたんですね。上のものの種族を表していることもあることに驚きました。でも、下にいるものもいたような顔ではなくて、がんばっている顔をしていれば、もっとわかりやすいのに…。あまり「支えている」という雰囲気

伝わってきません。

足の下に踏んでいるものについては、教科書にも書いてあったけれど、今日の講義を聞いてやっとよくわかりました。主な神々や星座が総出で登場している胎蔵界曼荼羅を実際に見てみたくなりました。

最後の講義、おもしろかったです。毎回、毎回違ったスライドが見れて楽しい講義でした。

再認識が大切かと思った。

仏教とヒンドゥー教は同じ土地から生まれたものなのに、つながりのないまったく別の宗教だというように習ってきて、不思議に思っていました。ヒンドゥー教の神々に支えられて仏教の仏が存在しているという事実に感動しました。それがマンダラにも現れているのはすごいなぁと思いました。

もともとそんなに興味のある分野じゃなかったけれど、スライドをみただけでも単純におもしろかったし、後半のマンダラがすごくきれいでいろいろ見られてよかったです(たまに眠気に負けてしまったけど)。せっかく教科書として本も買ったので、また時間があれば読もうと思っています。ありがとうございました。

講義を通して、さまざまな仏が出てきた。中には私が好きなゲームに出てきたもの(ドゥルガー、ヤクシャなど)もあって、その仏がいったいどういうものなのかが何となくわかっておもしろかった。最後に再認識の話をしたが、なるほどたしかにそうかもしれないと思った。

足の下に踏むということは、土台であり、エネルギー(?)の源であるというのはとてもおもしろい。もっとヒンドゥーの神についても知りたいと思った。

意味から生まれるイメージについて、もう一度考

えようと思います。

足下に位置していた神が必ずしも敵対するものではないことは、本を読んで知っていたが、今日はより具体的な例を見ることでそれをより実感できた。今日は降三世明王が以前よりも、表現が稚拙で申し訳ないのですが、かっこうよく見えなかった気がします。仏教とヒンドゥー教の関係を知らないと何か微妙な気がしました。

他の神を足で踏んでいる像は、今までの講義では敵か何かだと思っていましたが、出身だったので、足で踏むということには悪い意味はないのですか。踏んでいるというよりは生えている感じなのでしょうか。母なる大地と聞いたときに、木のイメージがわきました。

火天が老人の姿で表されるのが意外だった。帝釈天はヴェーダのインドラのイメージから来たものだったということでしたが、中国の天帝が仏教に取り入れられて、帝釈天になったという話を聞いたことがあったので驚きました。

アグニ（火天）はやせた男性像で表現されていますが、これはインドの聖職者階級であるバラモンのイメージです。アグニは古代インドの火の儀礼であるホーマ（護摩）の主要な神で、この儀礼を司るのがバラモンだからです。手に水瓶を持っているのも、バラモンや、それにつながる苦行者のイメージに由来します。帝釈天はインドラの訳語として一般に用いられていますが、はじめの「帝」は、インドラが神々の中の王であることから、また、うしろの「釈」はインドラの別名である「シャクラ」から音をとっています。天帝が取り入れられたという説の真偽はわかりません。

仏の世界は広い。まだまだ知らない仏の世界があるので知りたい。

今まで講義があったけれども、知っていることは少しあったけれども知らないことがほとんどで、授業に少し興味がわきました。

仏教の神々は独自に生まれたものではなく、インドの神々からイメージを借りて生み出されたものだということがわかって、今までの仏教に対するイメージが変わったように思う。正直なところ少しがっかりしたというのものもある。仏像とかはもっと高尚なものだと思っていたので。独自性があれば高尚というわけでもないかもしれないが。

非常に素朴な疑問ですが、仏像の中で、多くの手を持つものが数多く見受けられますが、どういう意義があるのでしょうか。

神々の像を人間によく似た姿で表すのは、世界の宗教から見れば、特殊のことといってもよいかもしれません。多面多臂のような姿は、むしろ「聖なるもののイメージ」が人間の姿をとらないことと見るべきかもしれません。このような一種グロテスクな姿を、アイコンとして認めることができるかどうかは、その文化のもつイメージの許容性や嗜好によると考えるべきでしょう。日本人はインドやチベットの多面多臂のグロテスクな像には嫌悪感を感じるのが一般的ですが、不思議なことに、十一面観音や千手観音には敬虔な気持ちをいただきます。

今日の講義で、ヒンドゥー教の人が「ヒンドゥーの神と仏教の神は同じだから、ヒンドゥー教徒にならないか」と言っていた意味が分かりました。

ヒンドゥー教とは単に神々に対する信仰だけではなく、生活習慣に根ざした総体的な文化ですから、そう簡単にはヒンドゥー教徒にはなれないでしょう。（と、そのインド人？に言ってあげてください。）

神であっても人気、不人気によって地位が上がったり、下がったりするのが、絶対的な神を信仰するキリスト教などと違っておもしろいなあと感じた。そんな風に人々の考え、思いに接した神々だからこそ、イメージの混同や誤解が起りやすいのだらうなあと考えた。

ガルダは鳥の形をとっていたと思うけど、半分

人の形をしていたり、全体が人の形で表されたりするのだと思った。

今日はスライドがとても早くて残念だった。来週がんばります。先生の考えがすごい深いものだというのに気づきました。同じスライドを何度も見せたのは、そういうことだったんですね。お見事です。

意味を知ることによって形を再認識するというのは、最初矢印を引いたときはわからなかったが、意味を聞いてたしかにと思った。

前期の授業を通じて、マンダラが一番心に残っています。テストがんばります。

今までの講義を聞いてきて、自分の中での仏像の見方などが変化してきたと感じた。やはり、意味を知っているのと知らないのでは、大きな違いがあると感じた。これからは旅行に出かけたときに、仏像などを真剣に見てみたい。

密教の世界はすべてのことがらがマンダラにつながっているのだなぁと、全体を通じて感心しました。あまり深く理解はできなかったですが、密教の世界をのぞき見ることができてよかったと思います。

ヒンドゥー教の神と仏教の仏が関係し合っていて、片方だけでは説明できないということを知って、実際のそれぞれの教徒はどう仏たちをとらえているのだろうと思った。他宗教をかじったりするのだろうか。個人的にはヒンドゥーの神々の方が興味深い神話を持っていて好きだ。

仏教とヒンドゥー教は似ているとは思っていましたが、しかし、仏教の神々はヒンドゥー教の神々に囲まれてはじめて成り立つと聞いて、そんなにも密接な関係だったのか…と驚きました。どの宗教も最終的には富や豊穡を得るという点で共通しているのですね。

今まで邪気を踏む像は邪気を懲らしめているのだと思っていた。

この講義は私にとって少しむずかしかったです。マンダラもこの授業ではじめて知りました。予備知識が足りなかったかなと思いました。

3ヶ月間ありがとうございました。

昔の人は聖なるもののイメージを表そうとして、仏像などが誕生したが、最初はイメージもそこまで大きくなかったろうに、今となってはこんなに大きく有名で、画一的となって驚きだ。

最初に疑問を抱いた仏教とヒンドゥー教との関係がわかりました。そしてマンダラはとても重要な位置を占めていると思いました。

前、仏が画一化されていくという話があったけれど、それとは別に共通点というものもあるんだなぁとあらためて思いました。7は週7日制の7だし、6も1日24時間(6×4)の6(ちょっと苦しい気もするけど)だと考えると、昔のインドではすでに週7日制とかを意識していたのでしょうか。していたのなら、すごいと思います。

時間と関係のある数字ということであれば、4や12も重要でしょう。12ヶ月、24時間、60分などは12進法が基本となっています。インドは古くから天文学や暦学が高度に発達していた国です。1週間を7日とするのは基本中の基本です。

この講義を通じて、密教と一般の仏教の区別が今ひとつわからなかったのですが、インドでは日本と違って密教以外の宗派はおとろえてしまい、密教=仏教と考えればよいのでしょうか。

現在の日本仏教は宗派が基本となるので、真言宗や天台宗のような密教の宗派と、浄土宗、禅宗、日蓮宗のようなおもに鎌倉期に成立した宗派が併存しています。細かく見れば、さらに多くの宗派があり、中には奈良時代の南都六宗に起源を持つ宗派もあります。たしかにインド仏教はこのよう

な日本仏教とは様相がかなり異なるようです。歴史的に見れば、初期仏教、部派仏教、大乘仏教、密教という発展段階をたどるように、概説書などでは書いてありますが、実際は非常に古い伝統が生き続け、大乘仏教や密教のような新しい動きが現れた後も、しっかり残っていたようです。インドから仏教が姿を消すころでも、いわゆる小乗の僧団はインド各地で活動していたようです。大乘仏教と密教の関係も複雑で、大乘仏教がおとろえて密教になったわけではありません。密教の経典に説かれるような特殊な実践法や儀礼、あるいは神々の体系を重視する人々が、大乘仏教の教団内で、まとまって存在していたというのが実状のようです。

世界史をやっていて、シヴァ神の絵を見せてもらったことがあります。体から水が出てたり、頭が蛇なのは何か意味があるんですか。

シヴァの頭の水は頭から出ているのではなく、水を受け止めているのです。これはシヴァがガンジス河が天から降りてくるのを受け止めたという神話に由来します。蛇を体のあちこちに巻き付けているのは、インドの苦行者のイメージであるとともに、蛇の持つ宗教的な力や性的なイメージを、この神がそなえているからです。蛇を体に巻き付けるのは、軍荼梨明王のような密教の仏でも見られます。

スライドの中には力強い感じの仏像がいました（筋肉がすごいなど）。力強い印象を与える仏像は、密教世界において、どのような役割を演じているのですか。

おそらく明王系の仏たちのことだと思いますが、教科書の第7章あたりを読んでみてください。

動物に乗っている仏が多かったことが印象的でした。仏が乗る動物には何かきまりがあったりするんですか。

特定の法則はありません。ライオン、水牛、孔雀、イノシシなどの一部の動物については授業や教科書で取り上げました。仏教の仏たちも含め、イン

ドの神々は動物などに乗るのが一般的ですが、そこに特定の「きまり」を見つけることは困難なようですし、むしろ、個別の事例を考察することで、その神の性格や起源が明らかになることがあります。

孔雀や水牛、星座など、いろいろな動物が出てきましたが、これまでにはあまり出てこなかったので、新鮮だった。今日配布の神々の名が書かれた図を見て、この授業でさまざまな神についての話を聞いたのだとあらためて思った。

仏のイメージはつながっていくとわかっていても、こんなにも見事につながるなんてすごいとあらためて思った。

今日で講義が最後だった。来週のテストをがんばりたい。なぜ水天が懲罰神なんですか。

水天すなわちヴァルナは、アーリア人の神々の世界の中で、古い時代の最高神でした。教科書にも書いてありますが、アーリア人の神々にはアスラとデーヴァという二つのグループがあり、ヴァルナやミトラはアスラのグループの中心的存在です。懲罰神というよりも司法神といった方がよかったかもしれません。世界の秩序を司り、それを乱すものに厳罰を与えます。世界が一定の秩序によって維持されているというのは、インドでは一貫して認められる考え方です。ヴァルナというのは水も意味し、もともと水とのつながりを持っていた神なのですが、後世のヒンドゥー教では、最高神としての尊厳を失い、水の神としてのみ信仰されるようになります。

今日のスライドは色とりどりできれいでした。テスト勉強に向けて今までのプリントを見直し始めなければならないと思いました。けっこうあるので時間がかかりそうです。